

# 長 沖 古 墳 群 XIV

—久保地区 D 地点・第 66 号墳—

2014

本庄市教育委員会

なが おき こ ふん ぐん  
長 沖 古 墳 群 XIV

—久保地区D地点・第66号墳—

2014

本庄市教育委員会



## 序

埼玉県北部に位置する本庄市は、北は関東最大の河川で群馬県との県境をなす利根川から、南は秩父の峰々に連なる標高 500 m 級の山々からなる上武山地まで、南北に細長い起伏の変化に富んだ地形と、緑豊かな自然環境に恵まれた大変住み良い場所です。そのため当地域の歴史も古く、各時代に生活していた先人達の活動の痕跡である埋蔵文化財包蔵地も市内には 500 箇所以上もあり、現在のところ最も古いものは関東ローム層下の約 3 万年前の旧石器時代まで確認されています。

本書は、本庄市児玉町長沖に所在する埼玉県選定重要遺跡の長沖古墳群の中央部に位置する久保地区 D 地点の発掘調査の成果を記録した報告書です。

調査区内からは、ローム層下の旧石器時代の文化層、古墳時代前期の竪穴式住居跡、南側の環状 1 号線建設に伴って調査した長沖 66 号墳の周溝跡の一部などが検出され、その他に縄文時代の土器や石器の破片も出土しています。これらは、文字による記録や伝承のない有史以前の郷土の歴史や文化を物語る貴重な資料であり、これらの文化財を保存記録し、後世に残し伝えていくことが、現代を生きる我々の重要な責務の一つと言えるでしょう。

本書が、学術研究の資料としてはもとより、埋蔵文化財の理解と文化財保護の啓発・普及の一助として、多くの方々にご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、現地の発掘調査から報告書の刊行にあたり、文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜りました株式会社セブン-イレブン・ジャパンと地権者の方々や様々なご協力とご尽力を賜りました皆様に対して、心からお礼申し上げます。

平成 26 年 12 月

本庄市教育委員会  
教育長 勝山 勉

## 例 言

1. 本報告書は、埼玉県本庄市児玉町長沖 272—1、277—1・3 番地に所在する長沖古墳群久保地区 D 地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社セブン—イレブン・ジャパンの店舗建設に伴う事前の記録保存を目的として、平成 26 年 5 月 19 日～同年 6 月 9 日の期間に本庄市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の経費は、土地所有者の倉林孝一と中林 功が負担した。
4. 発掘調査担当者は、本庄市教育委員会文化財保護課の恋河内昭彦と的野善行があたり、現地調査には株式会社測研文化財調査室の大塚昌彦が専従した。
5. 整理作業及び報告書刊行にかかる業務は、株式会社測研に委託した。
6. 本書の執筆は、第 1 章を本庄市教育委員会文化財保護課が、第 5 章をパリノ・サーベイ株式会社、それ以外を大塚が行った。
7. 本書掲載の、遺構写真は、大塚が、遺物写真は山崎 悟が撮影した。
8. 本書の編集は、大塚が行った。
9. 炭化材樹種同定及び石材目視鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
10. 発掘調査・整理調査及び報告書刊行に至るまで、以下の方々からご協力・ご指導をいただいた。  
赤堀岳人、石井克己、小菅将夫、坂本和俊、坂元秀平、鈴木徳雄、大工原 豊、高橋 敦、高林真人、橋本真紀夫、山口逸弘
11. 発掘調査及び整理・報告書刊行に関する組織は、以下のとおりである。

主体者	本庄市教育委員会	教 育 長	勝山 勉
事務局		事務局長	関和 成昭
	文化財保護課	課 長	川上 美恵
		課長補佐兼	
		埋蔵文化財係長	太田 博之
		主 幹	恋河内 昭彦
		主 査	大熊 季広
		主 査	松本 完
		主 事 補	栗原 秀太
		臨時職員	的野 善行
		調 査 員	大塚 昌彦（株式会社測研）

---

## 凡 例

1. 遺跡全体図におけるX・Y座標値は、世界測地系に基づく。
  2. 各遺構における方位は座標北を示す。
  3. 遺構図の縮尺は、各図に明示している。
  4. 遺物の実測図は1/4を基本とし、それ以外は各図に明示している。
  5. 遺構断面図の水準値は海拔を示す。
  6. 本書掲載の地形図は国土交通省国土地理院発行1/10,000「本庄」、長沖古墳群発掘調査・確認地点図は本庄市都市計画図1/2,500に加筆したものをを用いた。
- 

## 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯	(1)
第2章 遺跡の立地と環境	(2)
第3章 長沖古墳群の概要と久保地区D地点周辺	(4)
第4章 検出された遺構・遺物	(8)
第1節 古墳時代	(9)
第2節 縄文時代	(25)
第3節 旧石器時代	(29)
第4節 その他	(31)
第5章 自然科学分析	(34)
第6章 まとめ	(37)
参考文献	(39)
写真図版	
報告書抄録	

---

## 挿図目次

第1図	長沖古墳群のスケッチ（明治18年東京人類学会雑誌より）	1
第2図	埼玉県の地形図	2
第3図	遺跡位置図	3
第4図	長沖古墳群古墳分布図（2014年現在）	5
第5図	長沖古墳群久保地区D地点とその周辺発掘調査箇所	6
第6図	長沖古墳群久保地区D地点遺跡全体図	8
第7図	66号墳全体図（前回調査部分含む）	10
第8図	66号墳石室内遺物出土位置図・石室基底面掘り方図・石室土層断面図	11
第9図	66号墳石室展開図	12
第10図	66号墳石室（玄室）出土耳環実測図（坂本ほか1990より）	12
第11図	66号墳周溝平面図・同周溝土層断面図	13
第12図	66号墳周溝内土坑平面図・土層断面図	14
第13図	66号墳周溝内出土土器実測図	16
第14図	66号墳周溝内出土土器拓影図	16
第15図	表採出土埴輪拓影図	16
第16図	1号住居跡平面図・出土遺物分布図・土層断面図・床下掘り方平面図	17
第17図	1号住居跡貯蔵穴平面図・土層断面図	18
第18図	1号住居跡出土土器実測図	18
第19図	4号住居跡平面図・出土遺物分布図・土層断面図	20
第20図	4号住居跡遺物出土状況図	21
第21図	4号住居跡床下掘り方平面図・断面図	21
第22図	4号住居跡出土土器実測図	22
第23図	4号住居跡出土土器拓影図	22
第24図	縄文土器拓影図	26
第25図	縄文石器実測図	27
第26図	C区出土ナイフ形石器	29
第27図	調査区の試掘位置図	30
第28図	旧石器時代試掘調査平面図・土層断面図	30
第29図	旧石器時代出土石器実測図	30
第30図	柱穴列平面図・同土層断面図及び斜め柱穴平面図	31
第31図	土坑平面図・同土層断面図	32
第32図	土坑出土土器実測図	33
第33図	1号住居跡における炭化材の出土状況と樹種	36

## 第1章 発掘調査に至る経緯

平成26年2月14日、本庄市児玉町長沖字久保272番地1・277番地1・277番地3の土地にコンビニエンスストアの店舗建設を計画している株式会社セブン-イレブン・ジャパン代表取締役井坂隆一氏より、同開発予定地における「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の照会文書が本庄市教育委員会に提出された。

これを受けて市教育委員会では、同開発予定地を埼玉県教育委員会発行の「本庄市遺跡分布地図」と照会したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地である長沖古墳群（県遺跡番号54-300）の範囲内であり、同開発予定地に隣接する南側は昭和58年（1983年）に都市計画道路環状1号線建設に伴って旧児玉町教育委員会が発掘調査を実施し（恋河内1984）、西側は平成7～8年（1995～1996年）に県道拡幅工事に伴って埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した場所（大谷1999）であった。

そのため、同開発予定地には埋蔵文化財が所在する可能性が極めて高いと考えられることから、事前に試掘調査を実施して、予定地内の埋蔵文化財の所在とその分布状況を把握する必要があることを説明し、事業主体者と土地所有者の了解を得て、3月25日から同28日に現地の試掘調査を実施した。その結果、開発予定地内には遺構の密度は低いながら、古墳時代の竪穴住居跡や調査区の南側に隣接する環状1号線内に所在した長沖66号墳の周溝跡などが検出された。

この試掘調査の結果に基づいて、平成26年3月31日付け本教文第415号により「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の回答を行い、協議のあった開発予定地には埋蔵文化財が所在すること、やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法第93条第1項により「埋蔵文化財発掘の届出」を埼玉県教育委員会に提出すること、その場合は埋蔵文化財の保存について、事前に市教育委員会と十分協議することなどを通知した。

その後、事業主体者と市教育委員会で先の試掘調査の結果をふまえて協議した結果、敷地西側は駐車場として保存し、東端の店舗建設部分については、埋蔵文化財の現状保存が難しいことから、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

かくして、現地発掘調査は平成26年5月19日から同6月9日までの期間に実施された。

（本庄市教育委員会文化財保護課）



第1図 長沖古墳群のスケッチ（明治18年東京人類学会雑誌より）



## 第2章 遺跡の立地と環境

本庄市は埼玉県の北西部に位置している。長沖古墳群は、埼玉県本庄市児玉町長沖に所在する。

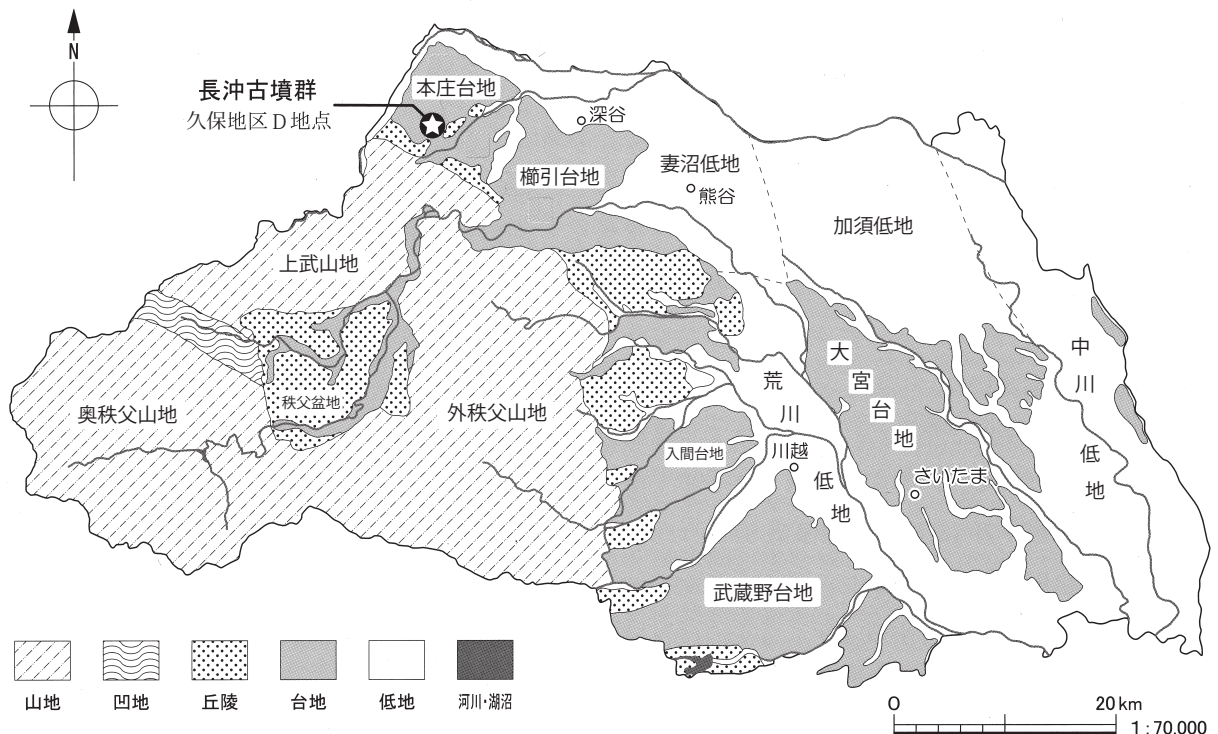
児玉町の町中心部J R 八高線児玉駅から、約 800 m 南西方向で長沖古墳群の北東端に位置する 30 号墳、31 号墳に到達する。

その所在は、明治 28 年に発行された鳥居龍蔵氏らの「武蔵秩父地方に於ける人類學的旅行」(阿部他 1895) の中に、考古学的所見を述べている。「児玉郡児玉町より、三四町も大宮の方に行きたる所にて左側の林中に小高き塚らしきもの此處彼處に夥しく存在するを認めぬ。・・・この場所は古来百塚と称する所にして。塚の数は實に百以上も有らん。」というようにおびただしい古墳の土饅頭が確認されていたのである。

本庄市の地形は、利根川右岸に広がる低地(妻沼低地)と市街地のある台地とその南方に連なる山地(上武山地)とに明瞭に大別される。長沖古墳群は、北側の本庄台地の中に上武山地から児玉丘陵が北東方向に長く伸びており、その丘陵上から台地に移行した地形に位置している。

長沖古墳群は、本庄市児玉町高柳から同長沖にかけての丘陵端部とそこから連続する台地上並びに小山川に形成された河岸段丘上の南斜面にかけて立地している。

長沖古墳群の東西に延びた丘陵地形は、北側に東流する「女堀川」と南側に東流する小山川により、外形を画された形となっている。



第2図 埼玉県の地形図



第3図 遺跡位置図



### 第3章 長沖古墳群の概要と久保地区D地点周辺

長沖古墳群は、古墳時代中期から終末期にかけて形成された埼玉県内最大規模の群集墳である。

小山川は北東方向に流下し、同左岸の丘陵から台地面にかけて長沖古墳群は分布している。その範囲は東西 1,700 m、南北 500 m の範囲に分布している。

前方後円墳 5 基、帆立貝形古墳 1 基、円墳 196 基の合計 204 基が平成 26 年現在で確認されている。

この古墳群も開発が進み古墳の多くが消滅している。古墳群の規模は、現在確認されたのが 204 基で、削平された古墳などの数はそれと同数位と考えられ、400 基位の規模を推定する。

この古墳群は、南北に貫く谷間を児玉・金沢・秩父県道 76 号線が通り、大きく 2 分している。西側を高柳支群、東側を長沖支群とよんでいる。

高柳支群の古墳群は、東西方向に伸びる小規模な谷があり、大きく 3 つの支群に分かれる。現在確認されている古墳の数から、北側は円墳 24 基、中間は前方後円墳 1 基、円墳 17 基、南側は円墳 22 基である。

長沖支群の古墳群の北西端に位置する 66 号墳は第 7 次調査の発掘成果から、66 号墳の東側が東西方向の埋没谷となっており、北側にある谷部へと繋がっているものと考えられ南北方向の小さな支群を形成している。

長沖古墳群久保地区D地点周辺の状況をみてみたい。

昭和 58 年（1983）に都市計画道路環状 1 号線建設に伴い、開発事前の発掘調査を児玉町教育委員会が長沖古墳群第 7 次調査（長沖久保地区 A 地点）として実施している。

発掘調査の結果は、4 基の古墳（158 号墳・159 号墳・160 号墳・66 号墳）、古墳時代前期（五領式）の竪穴式住居跡 3 軒、縄文時代前期（諸磯式）土壙 2 基の他、縄文時代前期（黒浜式）～中期（加曾利 E 式）の埋没谷が発見されている。正式な発掘調査報告書は未刊である。なお、第 7 次調査は埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会で開催された第 17 回遺跡発掘調査報告会発表要旨による内容である（恋河内 1984）。

平成 7 年（1995）～平成 8 年（1996）にかけて県道秩父・児玉線の東側拡幅工事に伴って、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が交差点「金屋南」の南東コーナー部 D 区、北東コーナーから北側にかけて E 区、他 3 か所を調査している。176・177 号墳の 2 基が調査され『長沖古墳群』として刊行している。

C 区は 176 号墳（旧村後 3 号墳）1 基の発掘調査で周溝幅 2～3 m、深さ 23cm で弧状の溝を確認するが、遺物は何もなかった。ただ、周溝内から旧石器時代のナイフ形石器 1 点の出土があった。

D 区は「金屋南」交差点の南東部であるが古墳時代前期の竪穴住居跡が 2 軒出土している。

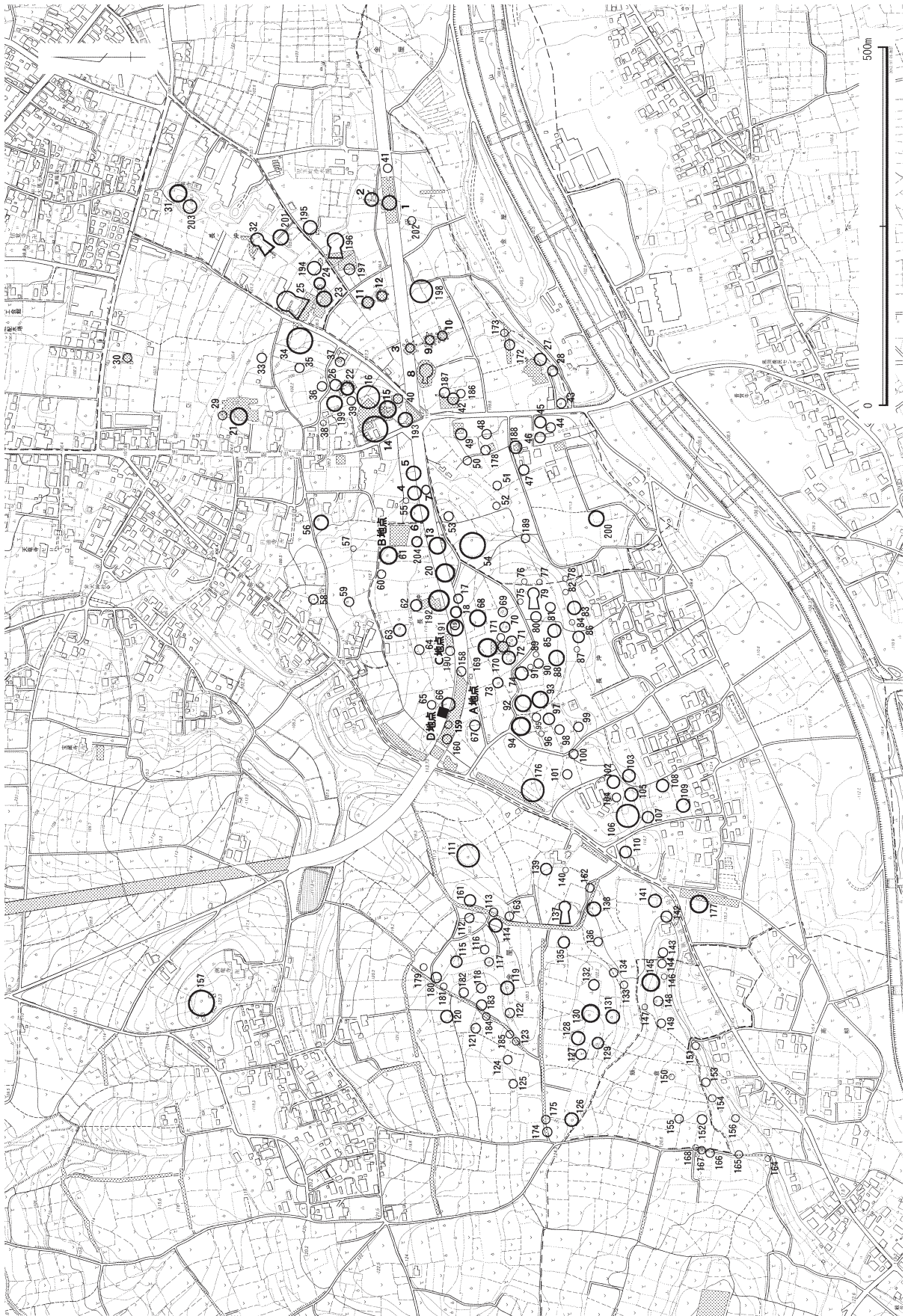
E 区は「金屋南」交差点の北東部で古墳時代前期の竪穴住居跡が 3 軒出土している。

久保地区 B 地点は住宅建設事前の発掘調査で、61 号墳南周溝の一部調査を児玉町遺跡調査会が平成 2 年度に実施。久保地区 C 地点は店舗建設事前の発掘調査で、190・191・192 号墳周溝の部分調査を児玉町遺跡調査会が平成 17 年度に実施している。192 号墳からは、円筒埴輪・形象埴輪（鬚・鞞・太刀形など）が出土している。

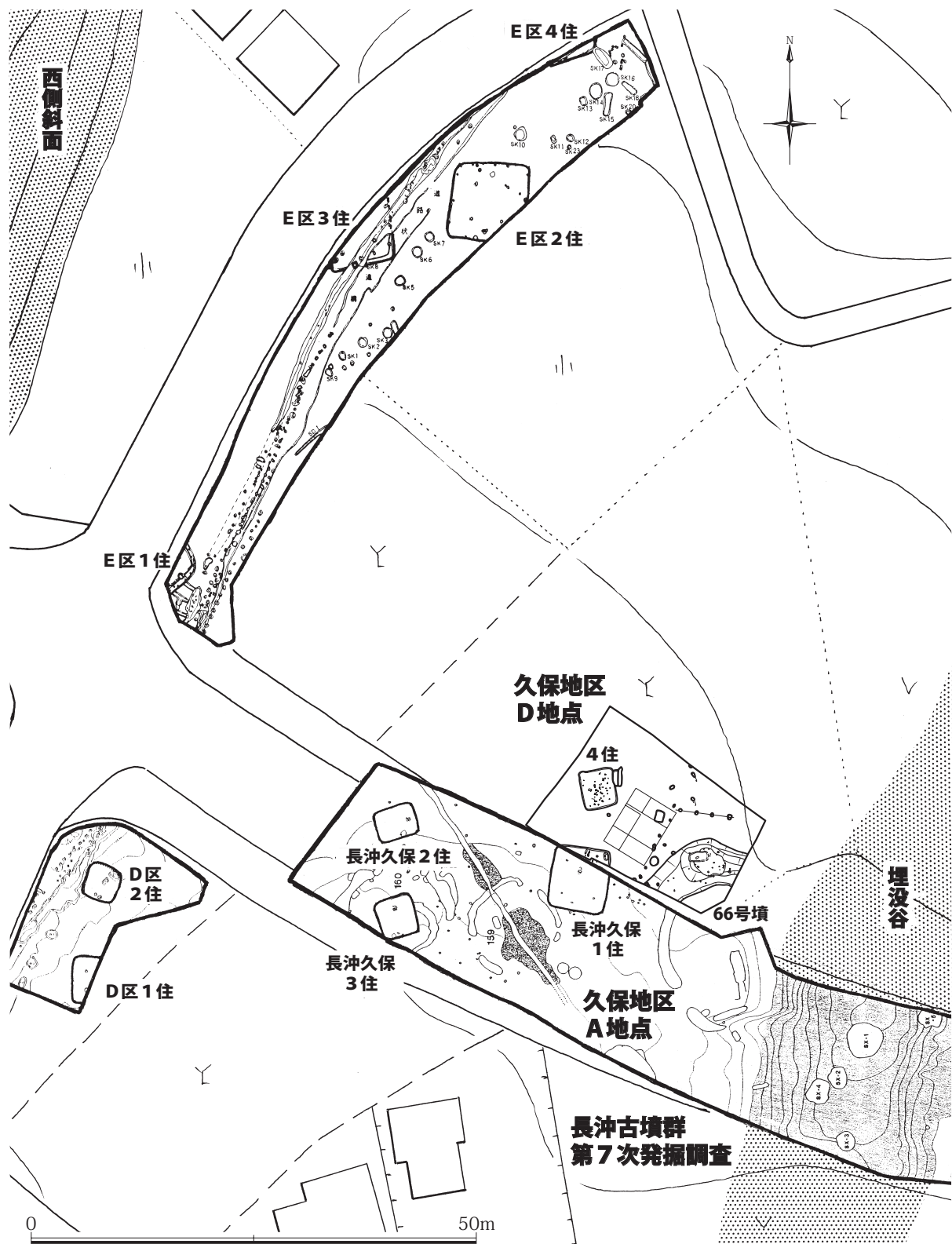
長沖古墳群の発掘調査変遷を紹介したい（第 1 表）。

長沖古墳群の最初の記録調査は、埼玉県立本庄高等学校考古学部が十兵衛塚古墳（79 号墳）を昭和 48 年に墳丘測量を実施した。





第4図 長沖古墳群古墳分布図 (2014年現在)



第5図 長沖古墳群久保地区D地点とその周辺発掘調査箇所

昭和51年に児玉町教育委員会が主体となり、1・2・3号墳の3基を第1次発掘調査を実施したのを皮切りに、昭和58年に第7次発掘調査が実施された。平成26年現在、本庄市教育委員会が主体となった今回調査した久保地区D地点に至るまで、これまでに多くの調査地点の実績が認められる。このことから長沖古墳群の調査を理解するため一覧表とした。

長沖古墳群の調査の概要 (第1表)

		小字地点	調査年	調査内容(古墳)	調査機関 刊行機関	報告書名	刊行	号数
I	1次	賀家ノ上	昭和51年2・3月	1・2・3号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
I	2次	賀家ノ上 金屋南	昭和51年6月 ～10月	8・9・10・11・ 12・14・15・16号 墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
I	3次	南 御沢	昭和52年6月 ～10月	22・23・24・ 25・26号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
I	4次	江ノ浜 賀家ノ上	昭和53年7月 ～11月	21・27・28・ 29号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
I	5次	御沢 賀家ノ上	昭和54年7月 ～10月	25・28号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群	1980	第1集
II	A区	道上	平成7年12月 ～8年5月	177号墳 (道上1号墳)	埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
II	B区	梅原	平成7年12月 ～8年5月		埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
II	C区	村後	平成7年12月 ～8年5月	176号墳 (村後3号墳)	埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
II	D区	久保	平成7年12月 ～8年5月		埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
II	E区	久保	平成7年12月 ～8年5月		埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	長沖古墳群	1999	第234集
III		村後A	平成6年7月 ～9月	71・72・169・ 170号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅲ	2002	第36集
III		飯玉C	平成8年7月 ～8月	48号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅲ	2002	第36集
III		飯玉D	平成10年11月	49号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅲ	2002	第36集
IV		賀家ノ上	平成11年8月 ～10月	42号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅳ	2002	第37集
V		飯玉E	平成15年11月 ～16年1月	188号墳	児玉町教育委員会	長沖古墳群Ⅴ	2004	第38集
VI		御沢	平成15年7月 ～10月	32号墳	児玉町教育委員会 本庄市教育委員会	長沖古墳群Ⅵ	2003	第2集
VII		久保B	平成2年4月 ～7月	61号墳	児玉町遺跡調査会 本庄市遺跡調査会	長沖古墳群Ⅶ	2007	第14集
VIII		久保C	平成17年9月 ～11月	190・191・ 192号墳	児玉町遺跡調査会 本庄市遺跡調査会	長沖古墳群Ⅷ	2008	第21集
IX		賀家ノ上 中之道B	平成6年10月 ～12月	172・173・ 30号墳	児玉町教育委員会 本庄市教育委員会	長沖古墳群Ⅸ	2011	第24集
X		飯玉B	平成3年11月 ～12月		児玉町遺跡調査会 本庄市遺跡調査会	長沖古墳群Ⅹ	2011	第41集
XI		金屋南	平成17年4月 ～18年1月	14・15・ 40号墳	児玉町教育委員会 本庄市教育委員会	長沖古墳群Ⅺ	2012	第27集
XII		賀家ノ上	平成23年7月	202号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群Ⅻ	2014	第36集
XIII		賀家ノ上	平成21年9月 ～23年6月	194・195・196・ 197・201号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群ⅩⅢ	2014	第39集
XIV		久保D	平成26年5月 ～6月	66号墳	本庄市教育委員会	長沖古墳群ⅩⅣ	2014	第42集
※		村後林	昭和48年	79号墳墳丘測量 (十兵衛塚古墳)	埼玉県立本庄高等学校 考古学部	いぶき	1975	8・9 合併号
※		倉林東	平成2年	157号墳	埼玉県教育委員会 さきたま資料館	埼玉県古墳詳細分布 調査報告書	1994	
※	6次	南・久保	—	4・5・7・13・20・ 17・18・19号墳	児玉町教育委員会	未刊		
※	7次	久保A	昭和58年5月 ～9月	66・158・159・ 160号墳	児玉町教育委員会	未刊		
※ 恋河内昭彦 1984 「長沖古墳群の第7次調査」『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会								

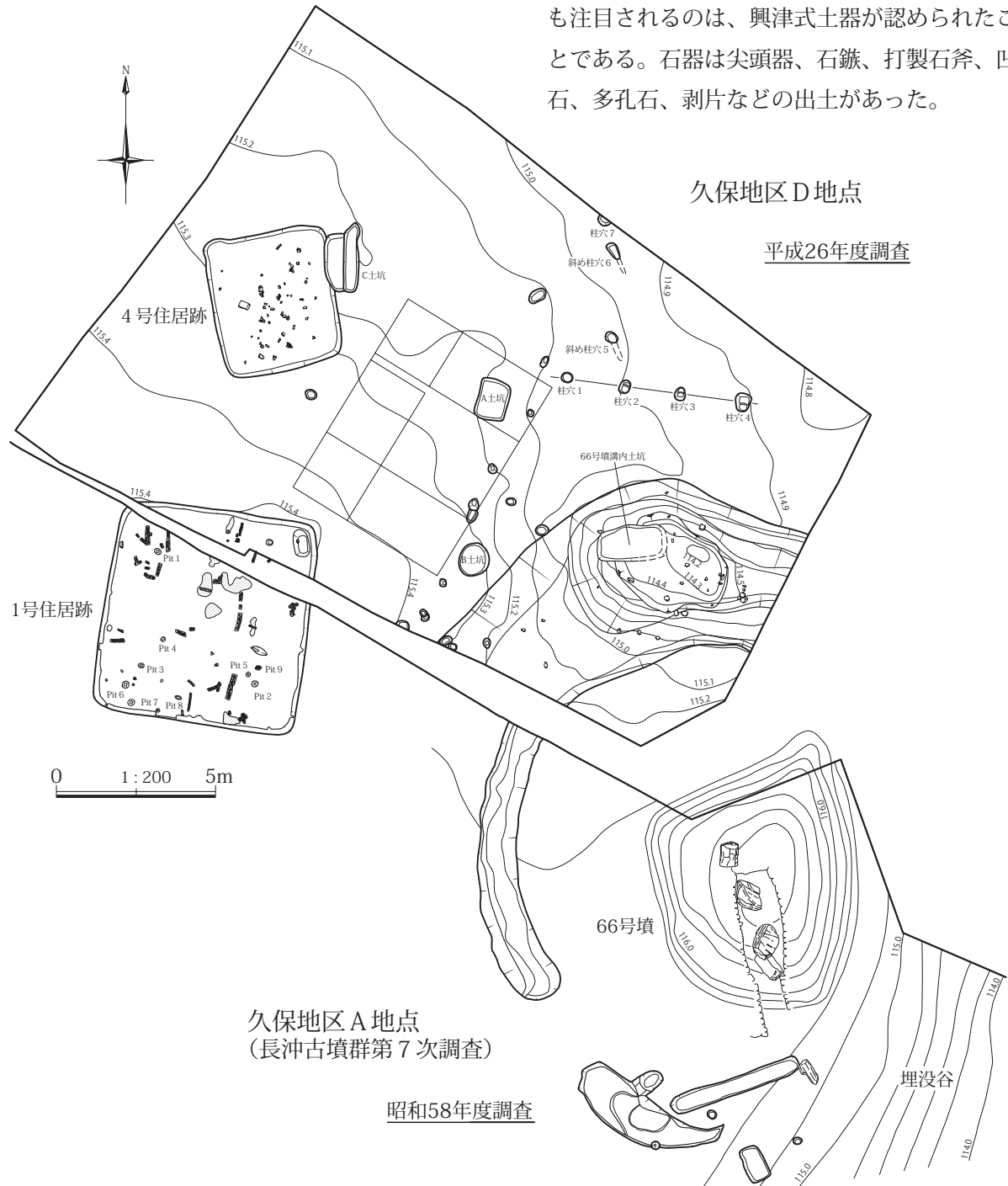


## 第4章 検出された遺構・遺物

検出された遺構は、古墳時代前期初頭の竪穴式住居跡2軒（1号・4号住居跡）である。古墳時代後期の円墳1基（66号墳）、時期不明の土坑3基、時期不明の柱穴列1（柱穴4本）、時期不明の斜め柱穴2本、時期不明のピット17カ所である。古墳時代前期の甕・壺・器台・埴・高坏・器台などの土器が出土している。

旧石器時代は、関東ローム層の始良Tn火山灰（AT層）下層で小破片2点の出土があった。

縄文時代は、前期植物繊維含有土器・同前期後半諸磯式土器・中期土器の出土があった。その中でも注目されるのは、興津式土器が認められたことである。石器は尖頭器、石鏃、打製石斧、凹石、多孔石、剥片などの出土があった。



第6図 長沖古墳群久保地区D地点遺跡全体図

## 第1節 古墳時代

### 66号墳

66号墳の調査前の状況は、東西5.6m・南北7.3m・高さ1.2mの規模で、この小山は遺骸埋葬施設である横穴式石室を中心にして存在し、耕作により石室間際まで削平されていたものである。

昭和58年度に環状1号線建設に伴う事前の発掘調査を長沖古墳群第7次調査（長沖久保地区A地点）として実施しており、66号墳の主体部および西側、南側の発掘調査を実施している。

今回の調査は、66号墳の北西側未調査区の周溝部発掘調査である。

前回調査の66号墳概要を説明する。

66号墳は、西側に長さ16m、幅1.2m～1.5m、深さ18cmの周溝が巡り、一部2.5m間は溝が途切れている。また、南側は南東方向に低く下がった埋没谷を形成しており、周溝は存在していない。

東側が谷という環境であり、石室に直接南側から墓参する可能性は低く、先の周溝の途切れた個所は掘り残しによる参道として機能していたことも考えられる。

主体部は、南に開口する横穴式石室で主軸方位はN-22°-Wである。

石室は胴張り両袖型横穴式石室で、全長5.2m・玄室長3.4m・奥壁幅96cm・玄室最大幅1.4m・羨道部長1.8m・玄門幅66cmを測る。

天井石は4枚検出したが、墳丘上の1枚を除き3枚は石室内に落ちていた。これらは長さ1m前後、厚さ30cm前後で中には加工を加えられていたものもあった。奥壁は高さ90cm・厚さ20cmの一枚石用い、その上には20cmの緑泥片岩1石が横積されている。側壁は片岩系河原石で模様積され、奥壁と玄門を立てた後、その間を小口積で埋めていく構築方法である。

右側壁は、全体に小さい石を使用して徐々に持ち送っているが、明瞭な模様積みではない。裏込めは砂利とローム土を用いている。

左側壁は右側壁に比べ、大きい石を揃え模様石は明瞭である。石積み持ち送りはほとんどなく、玄室中央部最下石は直線的に幅1.5m間で10～20cm程度玄室側へ張り出している。裏込めは地山の黒色土だけで根石は小口10～40cmの石を用い、地山を掘り込み砂利や礎石を敷いた上に据えられているが、張り出し部には存在せず、普通の扁平な河原石を使用している。

右側玄門石は、高さ90cm・幅50cm・厚さ10cm位の一枚石で、左玄門石は破壊され基部のみの残存である。羨門は壊されている。

棺床面は地山にバラスを敷いた上に、玄室部で2～5cm、羨道部で5～15cmの河原石を敷いている。

遺物は、盛土中並びに周溝内から僅かに円筒埴輪片が出土している。

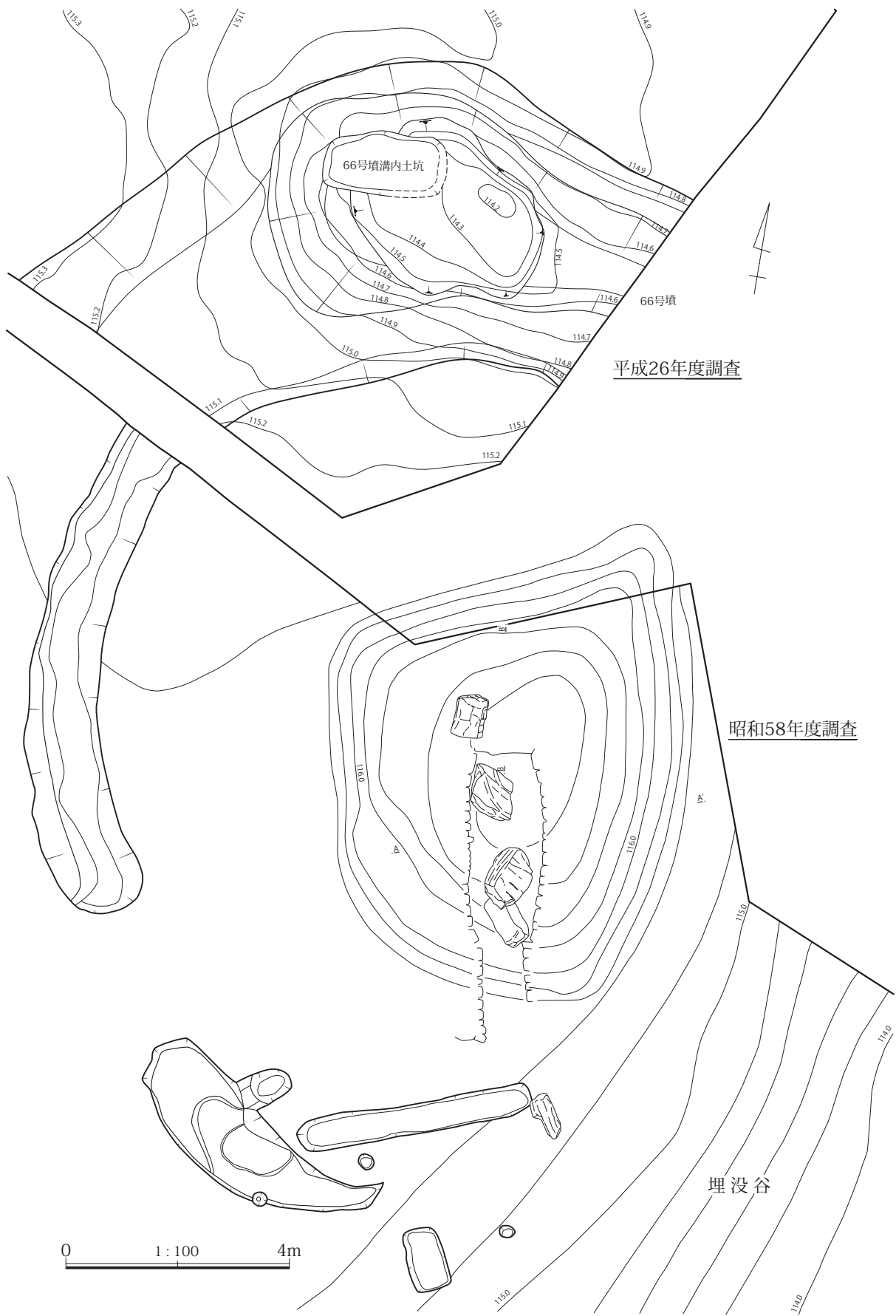
石室内は盗掘を受けていたが、玄室奥壁より右側壁下から人骨片・耳環3点、玄門より左側壁下から刀子1点・鉄片1点の出土があった。その他奥壁寄り左側の南北約110cm、東西40cmの範囲に骨粉の分布が認められた。

玄室から出土した耳環は3点である（第10図1～3）（註a）。

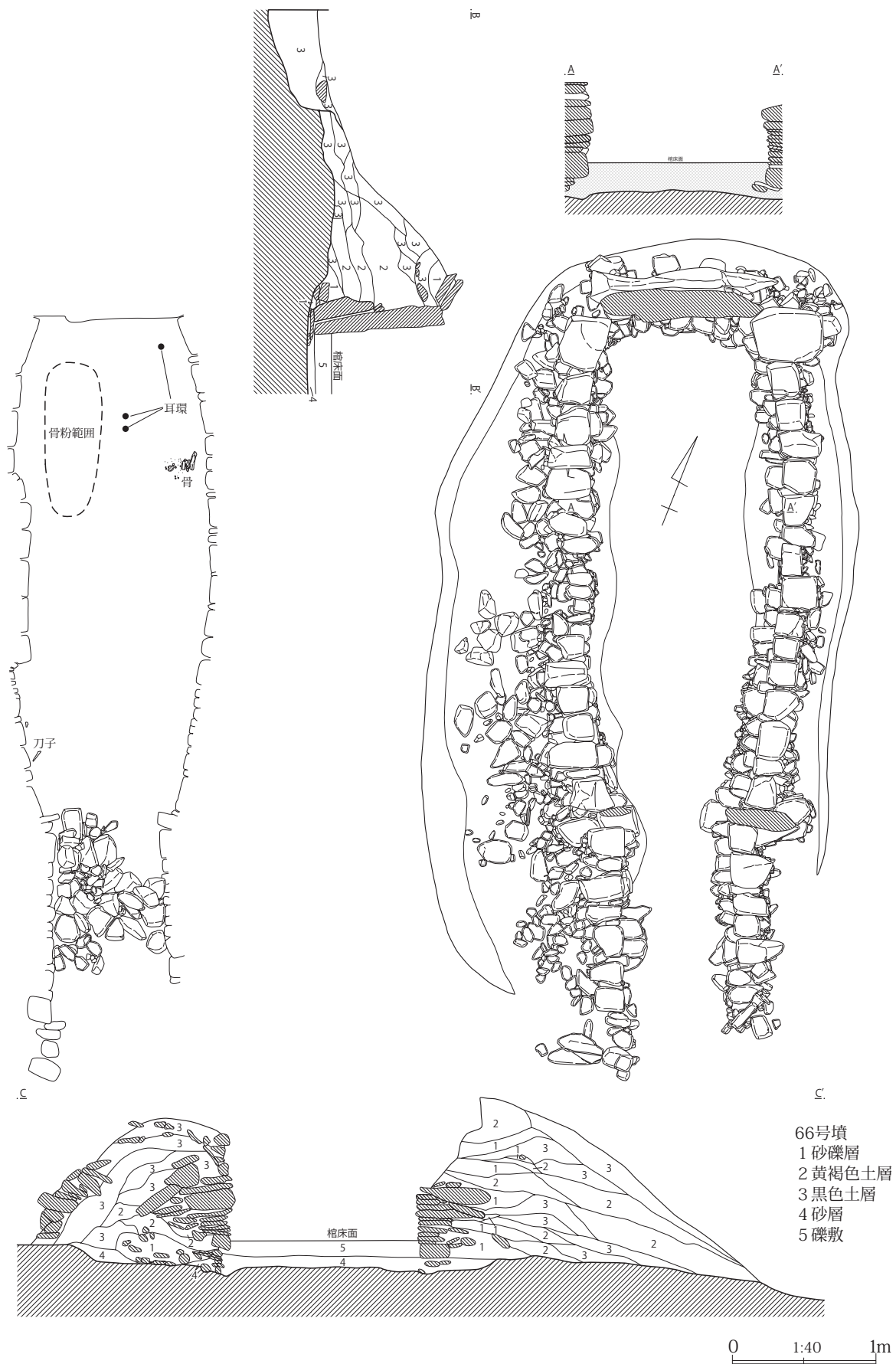
この耳環は、66号墳玄室内出土品であるが、秋山古墳群報告書（坂本ほか1990）に誤掲載されていたもので再掲載させていただくものである。

1は単品の中空式金環で、大きさは長径2.9cm、短径2.8cm、重さは1.55gである。

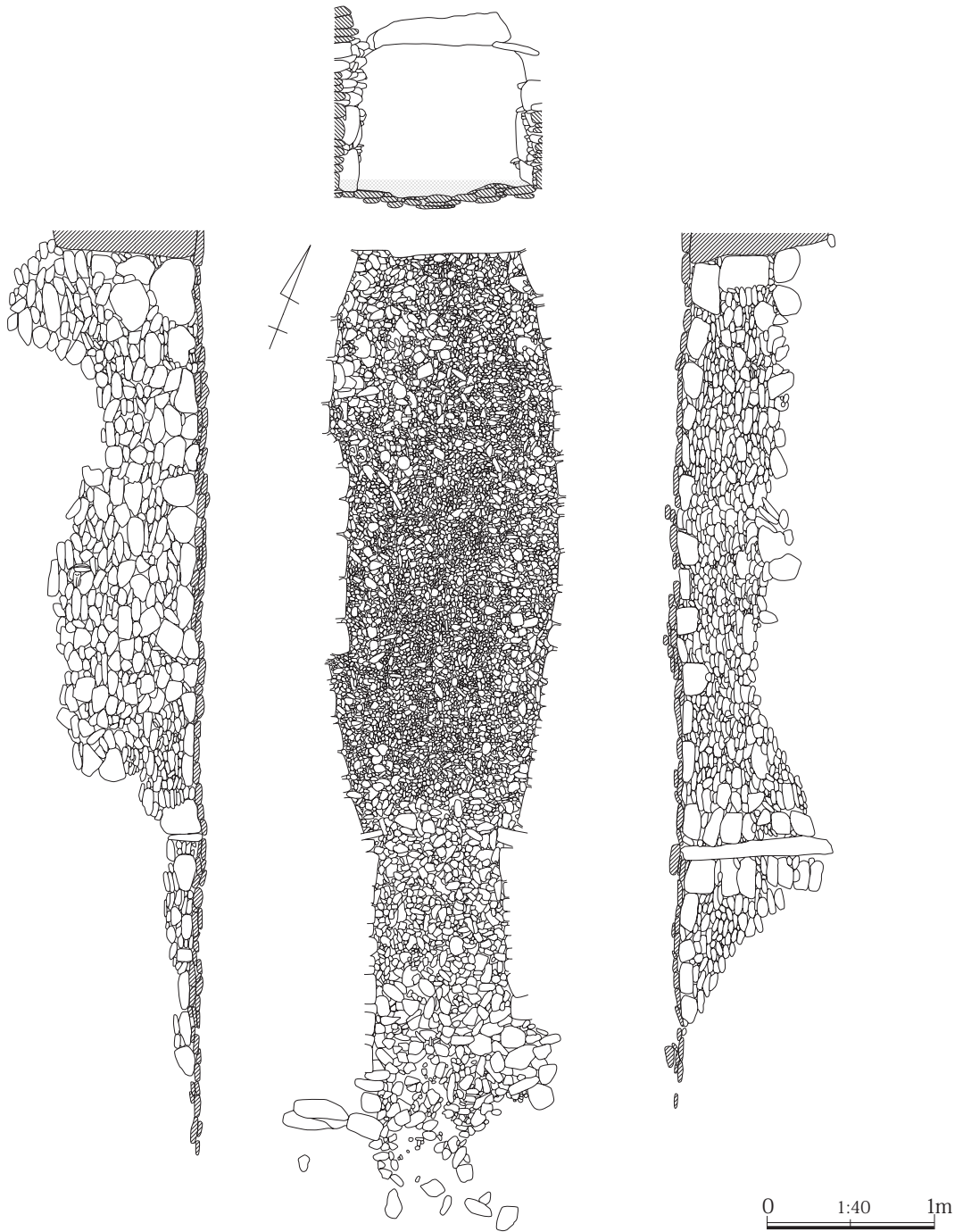
2・3は各々大きさが直径3.2cmを測り、重さは2.55～2.6g。表面は錆化のため薄く剥離し、



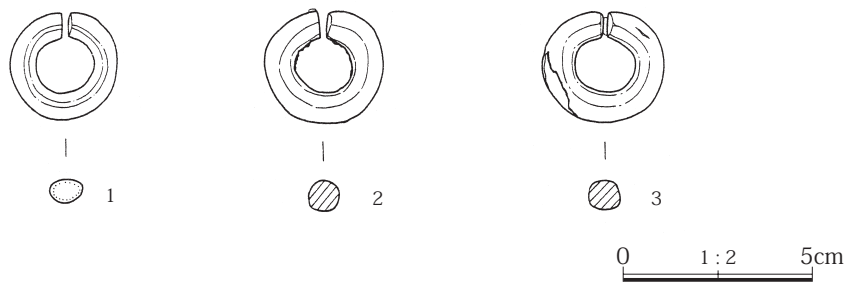
第7図 66号墳全体図（前回調査部分含む）



第8图 66号墳石室内遺物出土位置图·石室基底面掘り方图·石室土層断面图

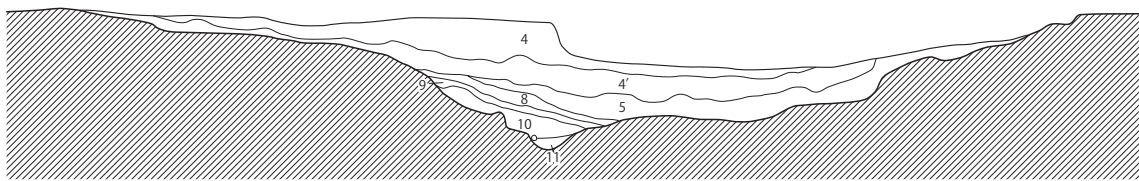
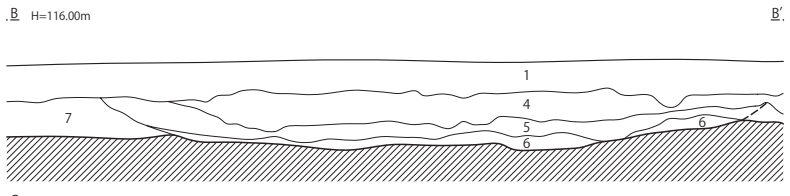
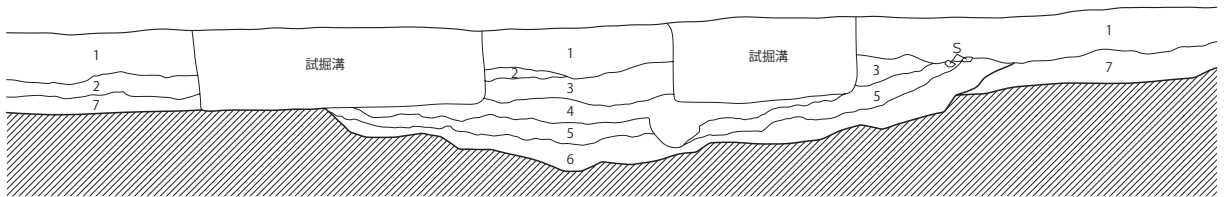
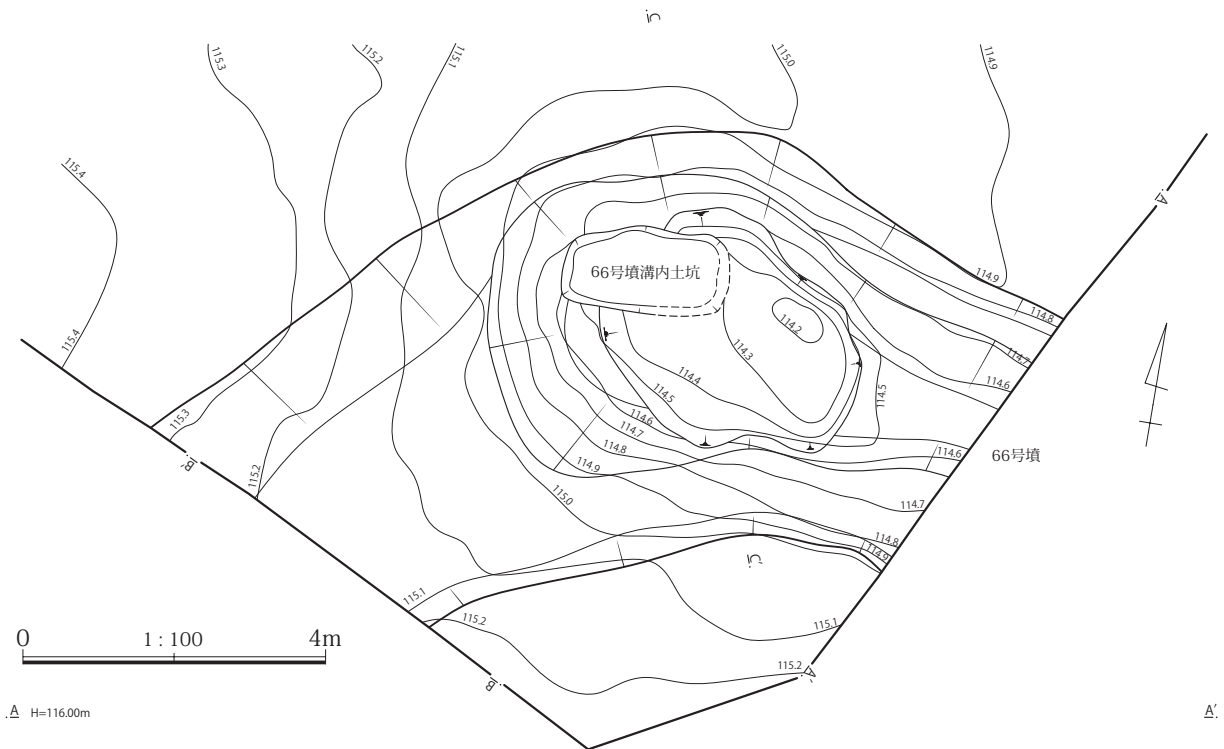


第9図 66号墳石室展開図



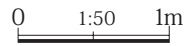
第10図 66号墳石室（玄室）出土耳環実測図（坂本ほか1990より）



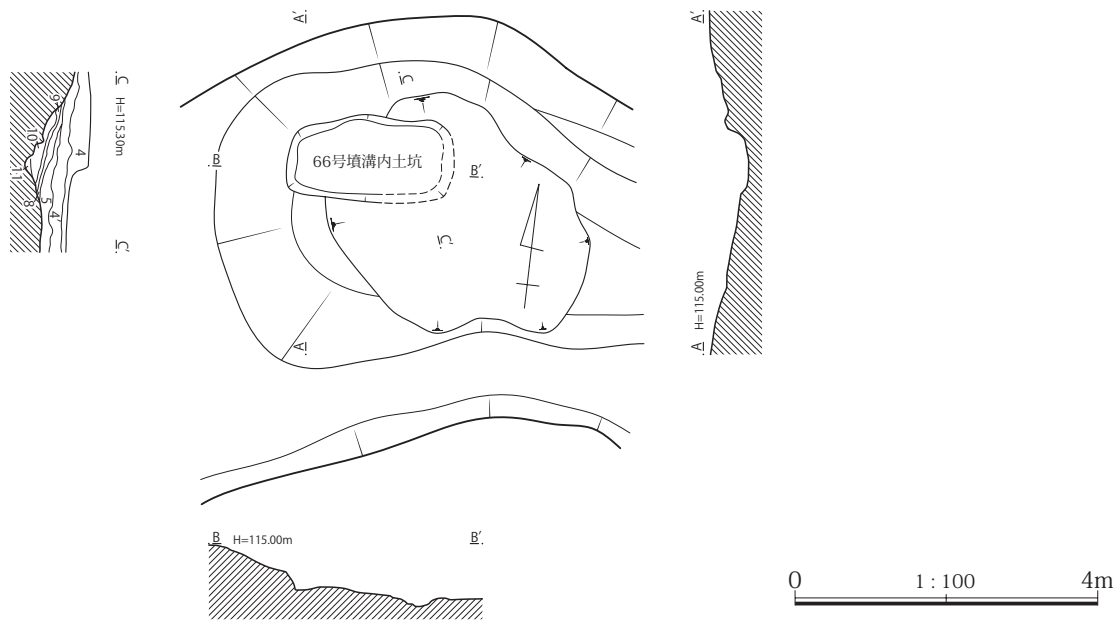


66号墳北西コーナー(中間西)

- 1 表土
- 2 褐色土層:浅間軽石( $\phi$  1 mm)を多量に含む。
- 3 暗褐色土層:ローム粒子を微量に含む。
- 4 黒褐色土層:ローム粒を微量に含む。しまり有。特に粘性が強い。
- 4' 暗褐色土層:この地層はこの部分にしか存在していないものである。ローム粒子が $\phi$  1 mm~5 mmのものが全体に混入している。
- 5 暗褐色土層:ローム粒を多く含む。ロームブロック $\phi$  1 cm弱を少量含む。しまり有。
- 6 黄褐色土層:ロームブロック粒子を多量に混入。ロームブロック $\phi$  0.5~2cm.3~4 cmを斑状に含む。
- 7 黄褐色土層:ローム粒子を多量に含む。しまり有。粘性弱い。
- 8 暗褐色土層:ロームブロック $\phi$  1 cm~3 cmを斑状に含む。ローム粒子も含む。しまり非常に強い、粘性あり。
- 9 黒褐色土層:黒色土層を主体にローム粒子を含む粘性あり。
- 10 暗褐色土層:8層と同じでロームブロックがやや $\phi$  1 cm~2 cm位と小さくなる。茶褐色土の粘性のあるものがある。  
(有機質の可能性有)
- 11 暗黄褐色土層:ロームを含む。粘性、しまり強い。



第 11 図 66 号墳周溝平面図・同周溝土層断面図



第 12 図 66 号墳周溝内土坑平面図・土層断面図

緑青がふき出し、部分的に銀箔が残っている。地金の銅は中実である。

66 号墳の時期は、石室の平面形態や構築法などから 7 世紀後半頃の築造と考えられている（註 b）。今回調査したのは長沖古墳群第 7 次調査の 66 号墳の北西側の周溝部である。

前回調査では周溝幅は 2 m くらいの狭いものであったが、今回は溝幅が西側で 4.5 m、北側で 4.0 m、北西側で 5.5 m、深さは北で 35cm、西で 45cm、北西で 70cm 以上と北西部が幅広で深さのあることが確認された。

また、周溝内に土坑の存在があったことが確認された。西側はローム層により確実に掘削されているが東側は推測規模となった。床面には黒色層や灰色の粘性の強い層が面的に広がっている。なお、この土坑のところだけに他の土層に存在していない地層がある。古墳覆土中に貼り床した特異な土坑である。

この土坑の平面形は長方形で大きさは、東西 2.2 m、南北 1.15 m、深さ 25cm 東西方向に長く、真北方向に直行する形で主軸方位は W - 4° - S である。

この土坑は周溝内土坑で、いわゆる特異な位置に埋葬施設を持つものと考えられる。床面上には白い 1 cm の粘性の強い物質があった。この白い粘性の強い物質が床一面に存在していたものと考えられる。

今回調査で得られた北西部周溝を前回古墳調査図面と重ねると第 7 図のようになる。古墳の墳形規格は玄室奥壁の位置が中心となり、墳丘規模は直径 14 m を測る。前回調査周溝は、削平が深く周溝底が残る程度であったため、周溝幅は平均 1.5 m 深さは 20cm であった。この古墳の周溝外側の立ち上がりで直径 17 m を測ることができる。しかし、北西周溝の遺存状況は良好で、西側周溝は幅 4.8 m、深さ 20cm、北側周溝幅は 4.2 m、深さ 60cm である。今回の調査分の残り良い周溝外側立ち上がりは半径 10.5 m であり、周溝外径 21 m を測る円墳である。また、周溝北側は通常周溝より 1 m 以上張り出している、これは周溝内土坑の存在が関連しているものと考えられる。

今回の周溝調査では、この古墳に伴う出土遺物はなかった。

周溝内から出土した石は、27 点の自然石が出土したが、これらはすべて古墳盛土側からの流入で

ある。この石は古墳葺石の石材が考えられる。石の出土した高さは、掘りの浅い西側では底面から10～15cmであるのに対して北西コーナーでは30～40cmの出土を示している。

なお、長沖古墳群では古墳の石材鑑定を実施した例がなく、今回がはじめての事例となる。

27点と少量ではあるが石材鑑定を行った結果は、別表のとおりである。

緑色片岩13点、雲母片岩9点、泥質片岩1点、緑色岩1点、礫質砂岩1点、砂岩2点である。数量が少ないが、緑色片岩48%、雲母片岩33%、泥質片岩4%、緑色岩4%、礫質砂岩4%、砂岩7%と1つの石材組成を見ることができた。

66号墳周溝内 出土石計測表（第2表）

番号	縦 cm	横 cm	厚 cm	重量 g	石質	備考	番号	縦 cm	横 cm	厚 cm	重量 g	石質	備考
1	17.3	15.0	16.8	5,550.0	緑色片岩	葺石	15	13.8	10.3	6.3	1,274.0	緑色片岩	葺石
2	12.1	10.2	5.1	982.3	緑色片岩	葺石	16	18.5	16.7	10.6	4,740.0	緑色片岩	葺石
3	15.7	14.5	10.8	3,370.0	緑色片岩	葺石	17	5.3	11.7	1.0	49.0	雲母片岩	葺石
4	8.0	6.0	1.2	115.6	緑色片岩	葺石	18	15.7	7.0	2.6	313.6	緑色片岩	葺石
5	10.6	4.1	3.2	195.7	緑色岩	葺石	19	22.3	11.7	9.8	3,090.0	砂岩	葺石
6	11.7	7.1	4.0	464.9	砂岩	葺石	20	15.7	9.2	3.8	611.7	緑色片岩	葺石
7	18.8	10.0	5.2	1,098.0	雲母片岩	葺石	21	2.8	7.6	7.8	73.4	緑色片岩	葺石
8	12.3	6.2	3.1	403.2	雲母片岩	葺石	22	14.3	14.8	10.8	3,890.0	緑色片岩	葺石
9	10.8	6.4	2.9	262.8	雲母片岩	葺石	23	16.1	10.4	6.2	1,353.8	礫質砂岩	葺石
10	9.2	3.4	2.5	97.9	泥質片岩	葺石	24	13.7	11.2	5.2	1,199.0	雲母片岩	葺石
11	22.0	15.0	3.8	1,648.0	雲母片岩	葺石	25	18.8	11.3	7.4	1,794.0	雲母片岩	葺石
12	21.2	15.0	5.9	1,980.0	緑色片岩	葺石	26	12.8	9.6	1.8	316.2	緑色片岩	葺石
13	16.7	16.2	9.0	3,400.0	緑色片岩	葺石	27	11.7	7.3	3.2	452.2	雲母片岩	葺石
14	12.0	12.0	6.3	1,103.0	雲母片岩	葺石							

### その他の遺物

その他の遺物は、66号墳の周溝内出土遺物他に古墳築造の年代とは異なっている古墳時代の遺物を報告する。

1は埴形土器、2は有段口縁の壺形土器である（第13図）。

3・4は壺口縁部であり、外面はハケ目調整、内面はヘラ横ナデ調整である。

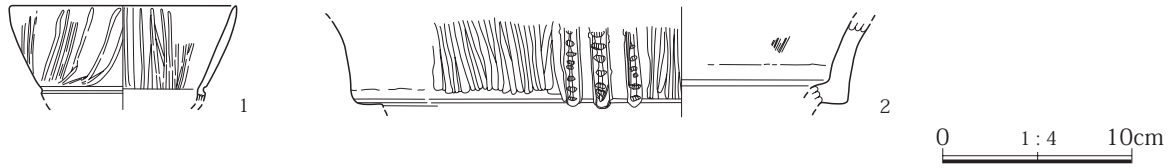
5・6は埴形土器の口縁部から腰部にかけての破片で、外器面はハケ目調整、内面口縁はヨコハケ調整。7は小壺破片である。これらは古墳時代前期の集落に伴う遺物と同時期のものである。

8から16（第14図）は、台付甕の胴部破片で器肉は薄く、調整はハケ目調整である。

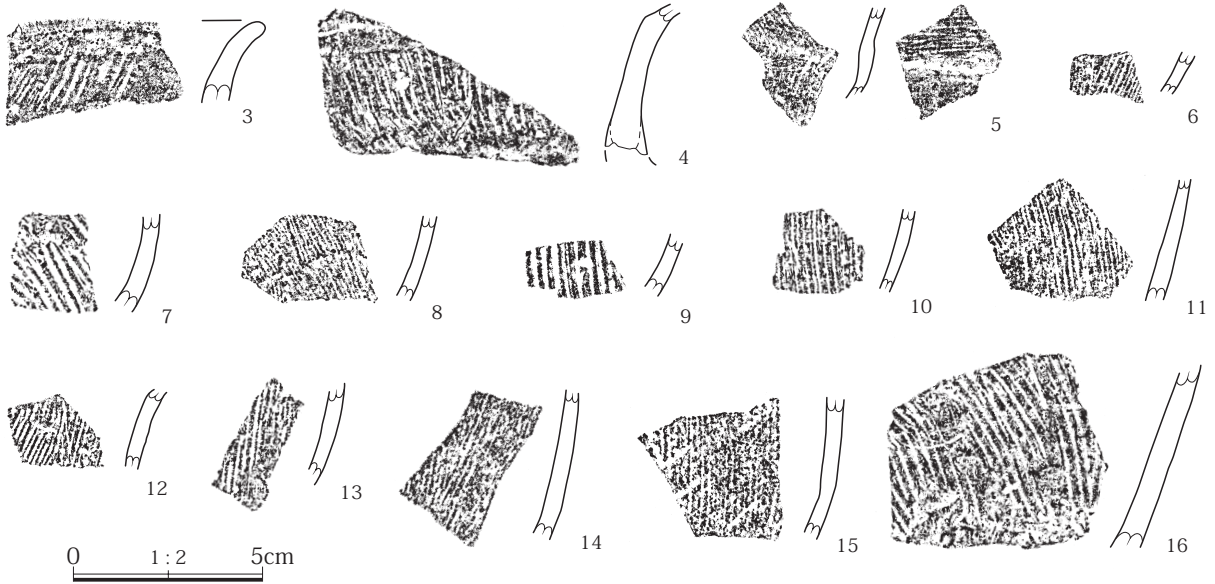
66号墳周溝内 出土土器観察表（第3表）

( ) 推定数値 [ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
1	埴	周溝	(12.0)	-	[5.0]	砂粒	良好	橙	外面口縁部斜方向のヘラミガキ調整。横位沈線で底部に移行する。内面口縁部は縦方向のヘラミガキ調整。	口縁部破片
2	有段口縁壺	周溝	(28.4)	-	[5.0]	砂粒	良好	橙	口唇部欠損。口縁部は有段口縁で3本の粘土紐を縦に等間隔に貼り付け、隆帯頂部を櫛歯状工具により連続刺突文を施文。口縁は縦方向のヘラナデ調整。内面の表面は全体的に剥落。一部に斜方向のヘラミガキが存在。大廓式土器。	口縁部破片



第13図 66号墳周溝内出土土器実測図



第14図 66号墳周溝内出土土器拓影図



第15図 表採出土埴輪拓影図

17 (第15図) は、円筒埴輪破片で内外面ともハケ目調整、上半は内外面とも剥落している。

註

註a 秋山古墳群庚申塚古墳・報告書(坂本ほか1990)の中に掲載された耳環が、実際は本墳石室から出土した耳環であり、今回の報告で修正掲載させていただいた。誤掲載されたのは、第17図1・6・7の耳環である。

註b 平成58年度の調査内容については、基本的に下記参考文献を参照した。

恋河内昭彦 1984「長沖古墳群の第7次調査」『第17回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会

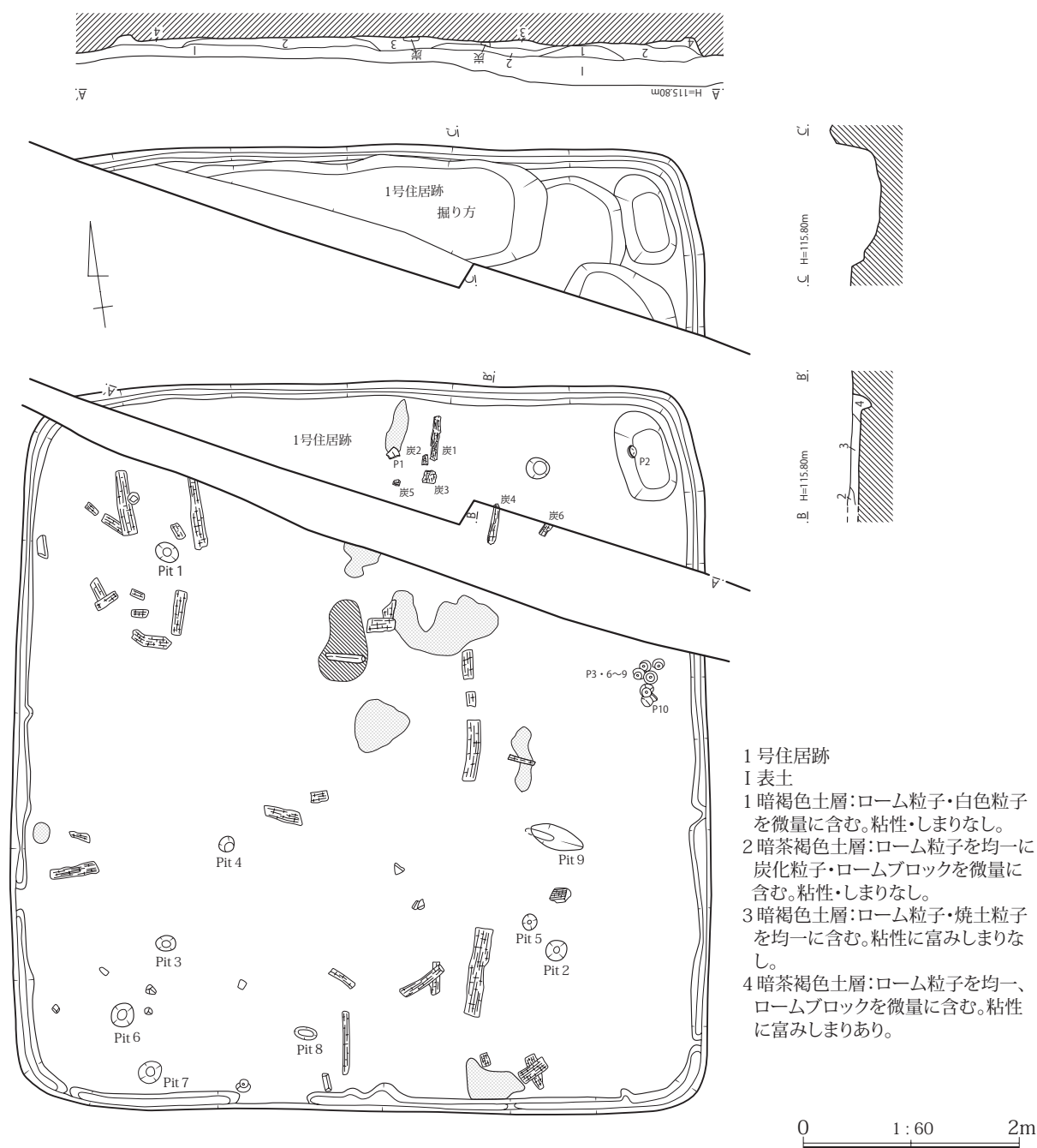
## 竪穴式住居跡

### 1号住居跡

昭和58年度に環状1号線建設工事に伴う事前の発掘調査を長沖古墳群第7次調査（長沖久保地区A地点）として実施しており、1号住居跡の発掘調査を実施している。今回の調査は1号住居跡北東側未調査区の発掘調査である。

平面形は隅丸方形で、規模は北側の調査ができ南北規模の測定が可能となり、南北6.7m、東西6.5mで確認面からの壁高は20cm前後である。

遺構確認面は関東ローム層である。



第16図 1号住居跡平面図・出土遺物分布図・土層断面図・床下掘り方平面図



北側の調査であったが、その北東コーナー部に貯蔵穴を付設している。

貯蔵穴の平面形は楕円形で、規模は南北 85cm、東西 48cm、深さ 22cmである。

壁溝は全周しているが、西壁・南壁に各 1か所ずつ僅かに途切れたところがある。

炉は住居中央やや北寄りに位置している。地床炉で中央に細長い川原石を東西方向に設置している。炉は不定楕円形で大きさは南北 40cm、東西 24cmである。

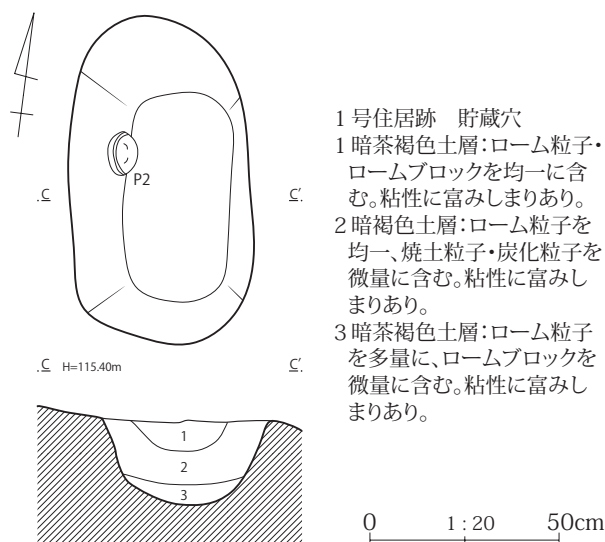
支柱穴は前回の調査で 3 本認められ、北東柱穴は未調査地に位置し、4 本柱と考える。

床面は平坦であるが、床は一旦 20cm位荒掘りし、埋め戻し貼り床している。貯蔵穴周辺は特に念入りに 2cm位の版築状の貼り床が顕著に施されている。

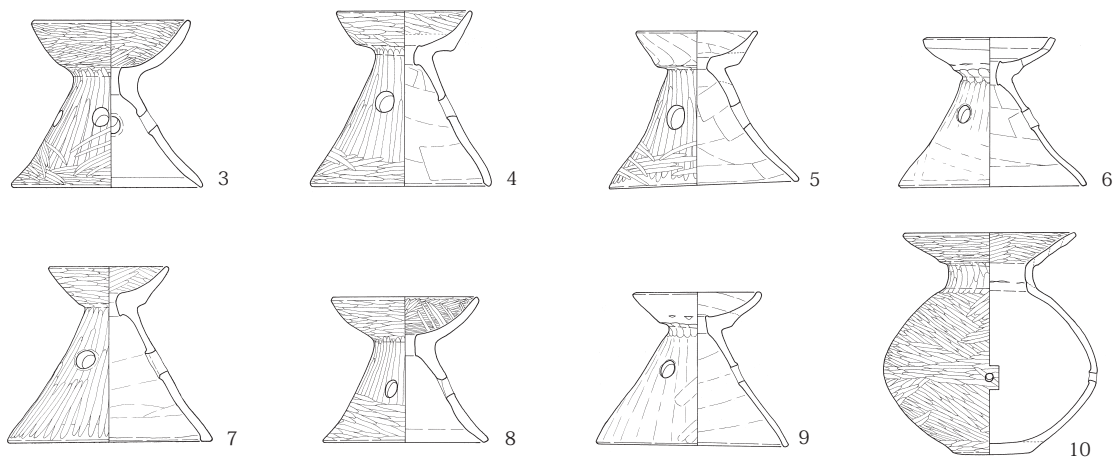
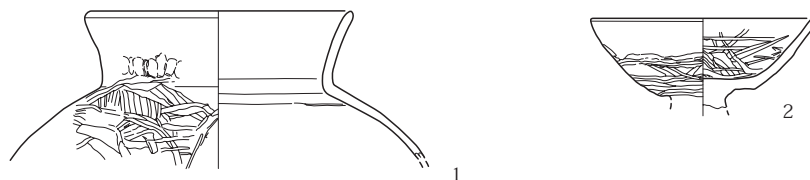
同住居は焼失家屋であり、7 次調査では 30 点ほどの炭化材が確認されている。今回の調査部においても 6 点の屋根垂木の炭化材と焼土分布を確認することができた。焼土は床面からは 5cm位浮いた位置に認められる。

炉の周辺には焼土分布が 3か所、南・西・北壁脇に各 1か所ずつ分布が認められる。

今回の 6 点の炭化材については、住居構築材の樹種同定（分析）をできるようにサンプリングしてある。炭化材は基本的に屋根構築材であり、垂木材がほとんどである。



第 17 図 1 号住居跡貯蔵穴平面図・土層断面図



(参考資料:昭和58年度 A 地区出土土器)

第 18 図 1 号住居跡出土土器実測図

竪穴住居床面下の掘り方は、竪穴住居の北壁ラインに沿って平面形が短冊状に東西 3.4 m、幅 70～80cm前後で深さ 10cm前後を掘られており、住居を掘る作業工程並びに 1 人の作業範囲をみる事ができた。

遺物は貯蔵穴から高坏の坏部分の出土があるが、焼土上から土師器甕口縁部の出土である。

3～10 は、第 7 次調査で出土した土器で完形の器台が 5 点と小形壺 1 点が 1 カ所からまとまって出土した。器台が 7 点、胴部に穿孔を持つ小形壺 1 点と共に直刃鎌 1 点・ガラス小玉 1 点が出土している。

1号住居跡 出土遺物観察表 (第4表)

( ) 推定数値 [ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
1	甕	P 1	14.2	-	[8.2]	砂粒	良好	暗橙	外面肩部ヘラミガキ調整ランダムに施す。口縁部下端指頭圧痕が横位に連続している。内面ヨコナデ調整。	口縁部 1/2
2	高坏	貯蔵穴	12.0	5.0	[4.8]	砂粒	良好	橙	内外面ともヘラミガキ調整。内面に黒斑有。脚との接合部で歪みがある。	坏部のみ 脚欠損
3	器台	前調査 No. 1	8.4	10.2	8.8	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔 4 か所。穿孔はミガキ調整後。脚部外面に黒斑有。外面全面ヘラミガキが丁寧に施されている。器台中央に穿孔有。内面器部ヘラミガキ調整。脚部内面ナデ調整。	ほぼ完形
4	器台	前調査 No. 15	7.2	9.6	9.3	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔 3 か所。穿孔はミガキ調整後。外面全面ヘラミガキが丁寧に施されている。器受部中央に穿孔有。内面器部ヘラミガキ調整。脚部内面ヘラナデ調整。	ほぼ完形
5	器台	前調査 No. 19	6.4	10.1	8.3	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔 3 か所。外面器部ヘラナデ調整。脚部はヘラミガキが丁寧に施されている。器受部中央に穿孔有。内面はヘラナデ調整。	完形
6	器台	前調査 No. 4	7.0	10.0	7.9	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔 3 か所。調整後穿孔。外面器部と脚下半はヘラナデ調整。脚上部ヘラミガキ調整。接合部は棒状工具による押え。器受部中央に穿孔有。脚部外面黒斑有。内面はヘラナデ調整。	完形
7	器台	前調査 No. 5	6.4	10.9	9.3	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔 3 か所。穿孔はミガキ調整後。外面全面ヘラミガキが丁寧に施されている。器受部中央に穿孔有。器内面はヘラミガキ調整。脚内部はナデ調整。	ほぼ完形
8	器台	前調査 No. 2	7.8	8.7	7.7	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔 3 か所。焼成前に穿孔。外面全面ヘラミガキが丁寧に施されている。器受部中央に穿孔有。器内面にヘラミガキ調整、脚部内面はナデ調整。器受部内面・脚外面黒斑有。	ほぼ完形
9	器台	前調査 No. 3	6.8	10.2	8.2	砂粒	良好	褐色	粘土紐積み上げ整形。脚部穿孔 3 か所。穿孔はミガキ調整後。外内面全面ヘラナデ調整。器受部中央に穿孔有。外面脚接合面に棒状工具による押え痕有。	完形
10	壺	前調査 No. 6	9.2	4.1	11.7	砂粒	良好	褐色	胴部穿孔土器、粘土紐積み上げ整形、胴部外面に黒斑有。頸部タテナデ調整、口縁部・胴部最大径部を横方向のヘラミガキ、それ以外を斜方向のヘラミガキ調整。内面口縁部は横方向のヘラミガキ調整。	ほぼ完形

#### 4号住居跡

平面形は隅丸長方形で、規模は南北4.4m、東西3.8m、壁高は20cmである。

この住居は、炉、柱穴、貯蔵穴、壁溝が見られない。床は貼り床されており、床面は平坦である。

貼り床は、暗褐色土層を主体にし、ローム層のブロック直径4cm以下を攪拌して貼り床されており、床面はロームが斑状に模様を作っている。

調査の結果は幅70～80cmで短冊状に掘っており、住居の壁面四辺に沿って掘られている。掘削における一人の工区仕事量を把握できたものとする。掘り方は6か所あり、次に説明したい。

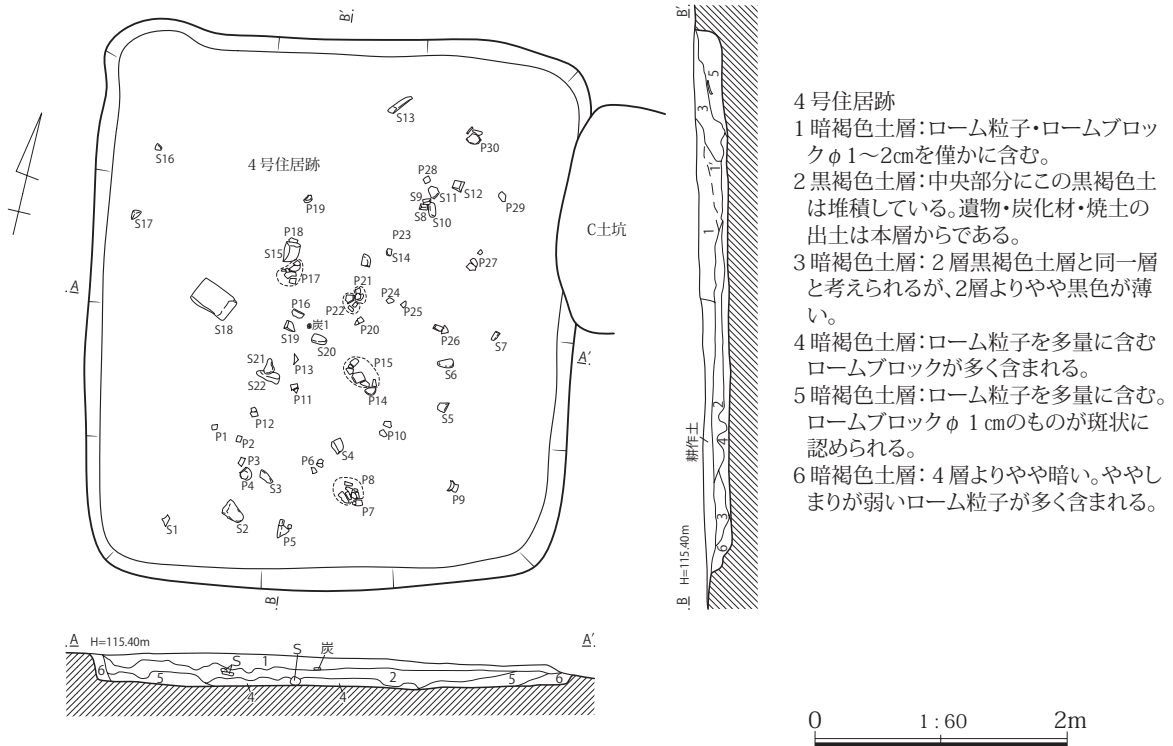
掘り方1は平面形が長方形で南北1.8m、東西92cm、深さ8cmである。掘り方2は平面形が不正長方形で南北80cm、東西1.4m、深さ10cmである。掘り方3は平面形が不正長方形で南北2.8m、東西80cm、深さ10cmである。掘り方4は平面形が長不定形で南北80cm、東西2.2m、深さ10cmである。掘り方5は平面形が不正楕円形で南北1.6m、東西80cm、深さ6cmである。掘り方6は平面形が不長楕円形で南北30cm、東西80cm、深さ6cmである。掘り方6は小さな掘り方であり、住居ほぼ中心に位置することから地床炉に関連する痕跡の一部と考えることができる。

遺物は床直の出土状況ではなく、すべて床から5～10cm以上浮いた状況で出土している。

遺物は、土器が30点、石器が7点、礫15点、炭化材1点である。

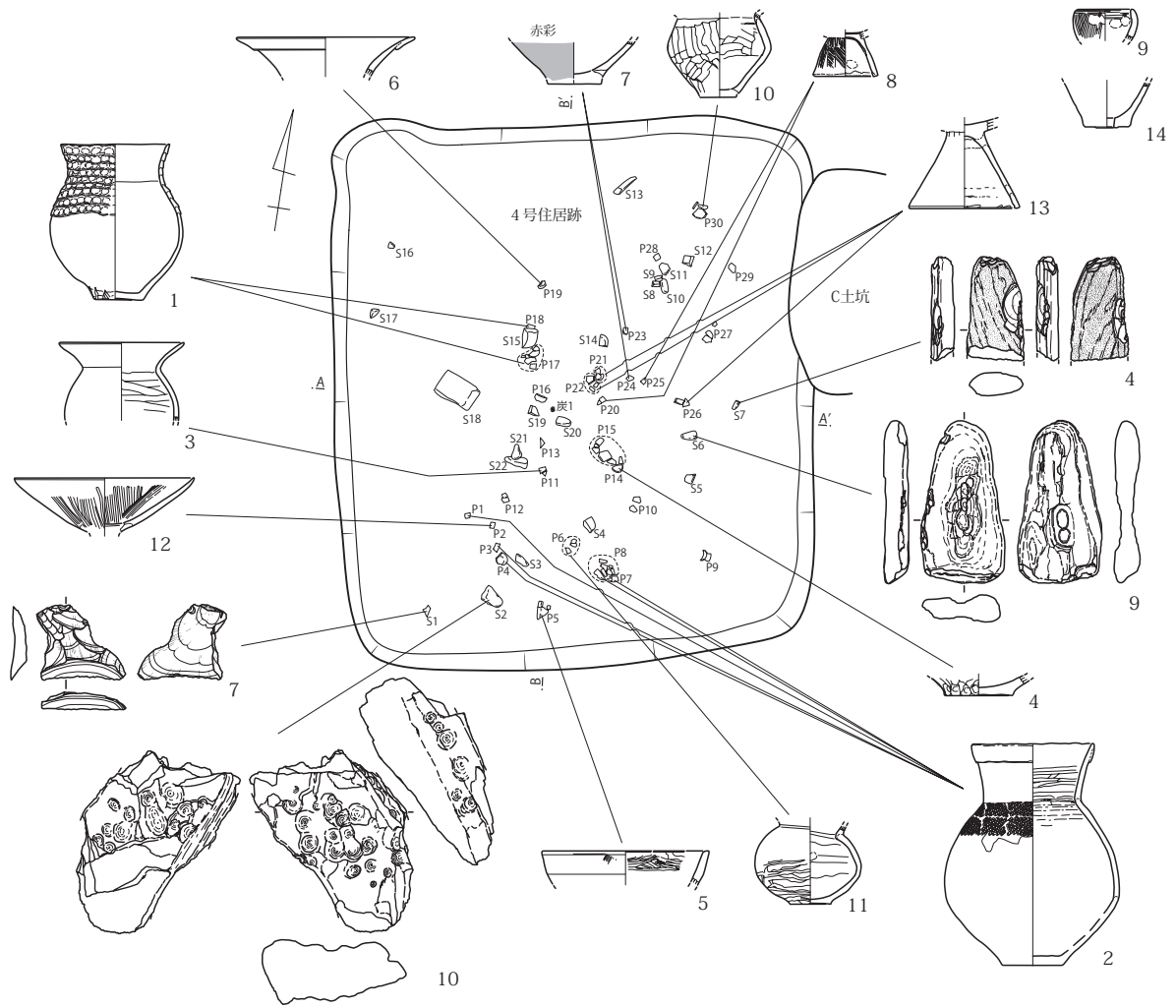
第23図15・16は、縄文施文を施した吉ヶ谷系土器の甕形土器である。縄文はLRである。

第23図17～22は器厚が2～3mmと薄く、器面に櫛歯状工具によるハケ目調整を施しているS字状口縁台付甕の一群である。17は台付甕のS字状口縁部最下段の隆帯と沈線で、頸部の括れ部分である。

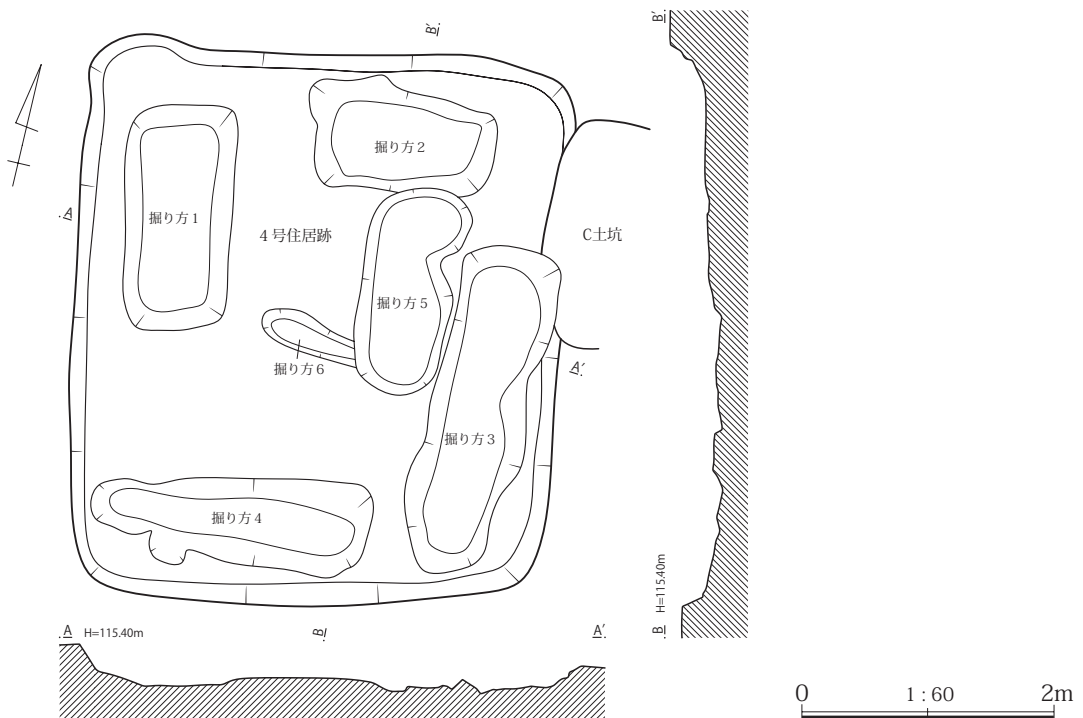


第19図 4号住居跡平面図・出土遺物分布図・土層断面図

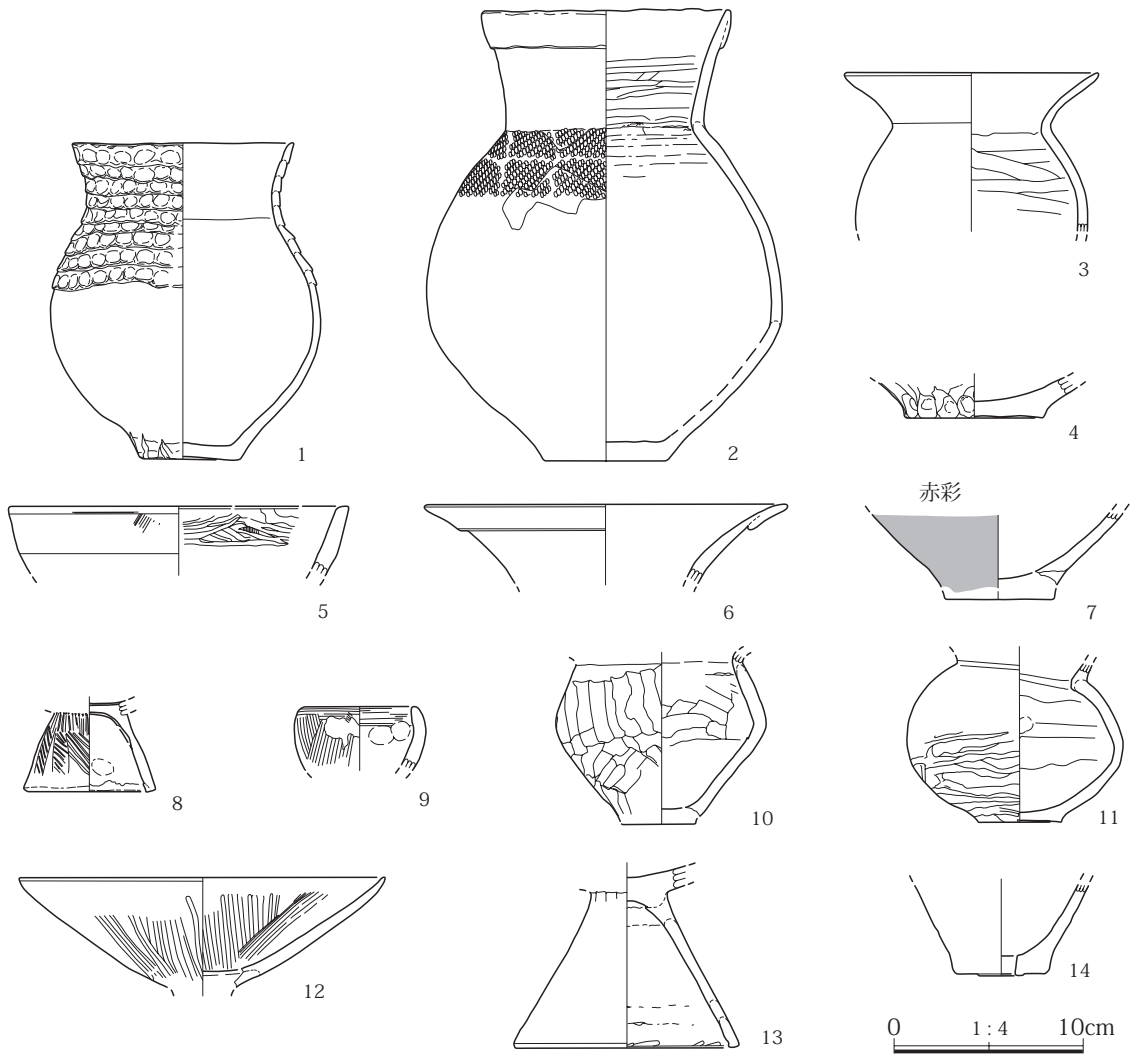




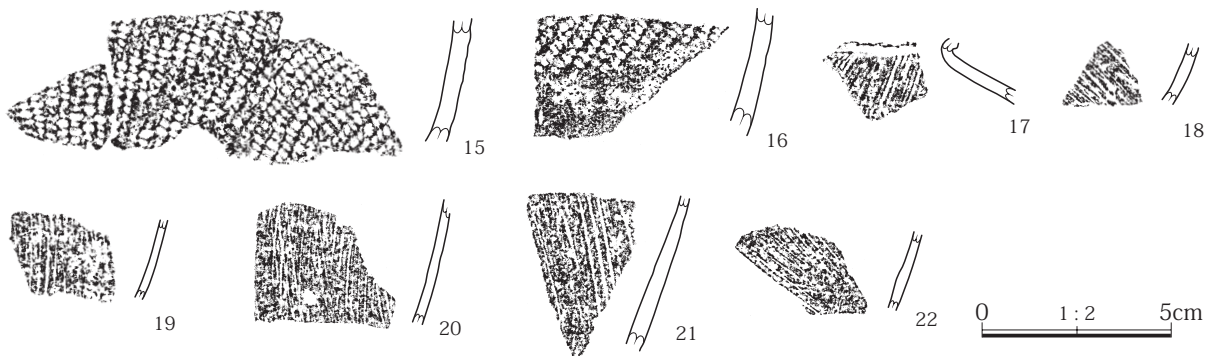
第20図 4号住居跡遺物出土状況図



第21図 4号住居跡床下掘り方平面図・断面図



第 22 図 4号住居跡出土土器実測図



第 23 図 4号住居跡出土土器拓影図

炭化材は顕微鏡観察で樹皮だけであったことがわかり、樹木の鑑定はできなかった。

土器は接合できる資料が多くあり、礫も5点が接合できた。

この土器群は古墳時代前期の古式土師器であるが、この地域の弥生時代後期の吉ヶ谷式土器の系譜を引く甕、壺胴部肩部に縄文の施文する土器群。また、群馬県の樽式土器の系譜を引く壺や高坏、S字状口縁台付甕など弥生時代から古墳時代への過渡期であり、異系統土器の入り乱れた状況は当地域の該期土器の特徴でもあり大変興味深い。

4号住居跡 出土遺物観察表 (第5表)

( ) 推定数値 [ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
1	甕	P 17 P 18	11.8	5.6	16.7	砂粒	良好	橙	口縁部多段輪積痕を9段残す。多段部は1段ずつ指頭圧痕が横位に残されている。輪積痕が顕著である。胴部下半縦ヘラミガキ調整。底部若干上げ底。吉ヶ谷式系土器。	口縁部 1/2
2	壺	P 1 P 3 P 4 P 7 P 8	(13.2)	6.6	23.8	砂粒	良好	橙	口縁部複合口縁。頸部ヨコナデ調整、肩部にLR縄文の施文を施している。体部はヘラミガキ調整。状態が悪く図化はできなかった。内面口縁は横ヘラミガキ調整、内部も小さな剥落痕が多数存在する。体部下半小さな剥落痕多数有。器最大幅胴部中位にある。底部大きく剥落。黒斑有。吉ヶ谷式系土器。	口縁部 4/5 欠損
3	広口壺	P 11	(13.6)	-	[8.2]	砂粒	良好	橙	黒斑有。未接合品復元実測。外面ヨコナデ調整不鮮明、内面横方向のヘラナデ調整。	口縁部破片
4	壺	P 14	-	7.4	[2.2]	砂粒	良好	橙	体部下端部に指頭圧痕が顕著に有、底部に糊圧痕有。	底部
5	壺	P 5	(18.0)	-	[3.6]	砂粒	良好	黒	器面はヘラミガキが丁寧に施されている。内面はハケ目調整後ヘラミガキ調整。口唇部は幅7mmの平坦で端部がシャープに作られている。	口縁部破片
6	壺	P 19	(19.2)	-	[4.1]	砂粒	良好	橙	口縁部折り返し口縁ヨコナデ調整。頸部までは縦ヘラミガキ調整。内面ヨコナデ調整。樽式系土器。	口縁部破片
7	壺	P 23 P 24	-	(6.2)	[3.8]	砂粒	良好	橙	外面赤色塗彩、黒斑有、底部輪積剥落痕。内面ヨコナデ調整、内面表面はほとんど剥落。	底部破片
8	S字状 口縁 台付甕	P 20 P 25	-	7.0	[4.8]	砂粒	良好	外橙 内黒	外面櫛歯状工具による縦・斜方向ハケ目、内面脚部折り返し、内外面に薄く別のオレンジ粘土で重ね焼きされている。	台部
9	小鉢		(6.0)	-	[3.3]	砂粒	良好	橙	外面ハケ目整形、内外面口縁部ヨコハケ調整、外面剥落痕、内面指頭圧痕有。	口縁部欠損
10	小甕	P 30	-	4.4	[8.3]	砂粒	良好	橙	外面上半はタテヘラ削り、下半は斜方向のヘラ削り、内面はヨコナデ調整黒斑有。	口縁・底部欠損
11	小壺	P 6	-	4.4	[8.8]	砂粒	良好	橙	外面はヘラによるヨコナデ調整、黒斑有、黒斑部のみでナデ調整が確認できる。若干上げ底。内面はヘラ調整。指頭圧痕有。	口縁・底部欠損
12	高坏	P 2	(19.4)	-	[5.8]	砂粒	良好	橙	坏と脚部で剥落。内外面とも縦方向のヘラナデ調整。	坏部 1/2
13	高坏	P 21 P 22 P 26	-	12.0	[9.7]	砂粒	良好	白橙	外面脚接合部ヘラ調整、内面輪積整形痕4か所有。内外面器面が風化。	脚部
14	甕		-	(5.2)	[4.7]	砂礫	良好	褐色	胎土に砂礫が多量に含まれ内外面ザラザラ、底部に直径1.4cmの孔が内側から外側にあけられている。	底部 1/2

4号住居跡 出土石計測表 (第6表)

番号	縦 cm	横 cm	厚さ cm	重量 g	石質	種類	図面番号
1	6.1	7.1	1.4	38.4	ホルンフェルス	剥片	第 25 図 - 7
2	22.0	13.0	7.0	2,200.0	緑色片岩	多孔石	第 25 図 - 10
3	13.7	6.3	2.9	318.2	雲母片岩	礫	
4	13.3	9.2	4.6	829.7	雲母片岩	礫	
5	10.8	8.2	3.7	305.9	雲母片岩	礫	
6	13.2	6.8	2.1	260.1	雲母片岩	凹石	第 25 図 - 9
7	8.4	4.6	1.8	114.4	緑色片岩	打製石斧	第 25 図 - 4
8	6.2	4.7	3.1	118.7	緑色片岩	礫 8+9+12+14 接合	
9	6.9	5.0	3.3	159.0	緑色片岩	礫 8+9+12+14 接合	
10	11.8	6.2	2.8	275.8	泥質片岩	礫	
11	12.0	11.0	3.5	549.9	雲母片岩	礫	
12	8.6	7.7	3.4	363.1	緑色片岩	礫 8+9+12+14 接合	
13	21.7	8.0	5.3	999.4	雲母片岩	礫	
14	8.8	6.8	3.3	326.0	緑色片岩	礫 8+9+12+14 接合	
15	17.7	11.5	7.4	2,140.0	礫質砂岩	礫	
16	7.1	6.4	1.4	84.8	雲母片岩	礫	
17	9.8	8.6	5.2	404.3	輝石デイサイト	地山内の石	
18	34.5	21.5	12.0	16,750.0	緑色片岩	礫 8+9+12+14 と同一個体	
19	10.3	7.2	5.3	541.3	石英片岩	礫	
20	21.2	7.0	4.2	981.4	泥質片岩	礫	
21	13.1	7.2	1.9	220.2	緑色岩	礫	
22	12.1	14.0	3.6	404.2	緑色片岩	礫	
23	1.7	1.4	0.5	1.1	チャート		
24	1.7	1.9	0.4	0.6	チャート		
25	1.6	1.7	0.3	0.6	チャート		

## 第2節 縄文時代

縄文時代の遺構は存在していない。

縄文時代の遺物は、66号墳周溝内や4号住居跡覆土内、表採で出土している。

### 土器

前期前半黒浜式期の繊維含有土器、前期後半諸磯式土器などの他に、北関東地方の茨城県地方で特徴ある興津式土器が出土している。

第1群土器(第24図1～4)早期の土器を一括する。1は無文系土器の口縁部破片である。2・3・4は条痕文系土器群である。4は口縁部片で半截竹管の平行沈線が横位と弧状に施されている。

第2群土器(第24図5～9)は、前期前半黒浜式土器のもので、胎土に植物繊維を多量に含有している一群である。5・6は半截竹管による平行沈線文を施文、5は地文に0段多条の縄文を、6は無文である。7は0段多条の縄文を羽状に施文し、全体的には菱形縄文を構成している。8・9は0段多条縄文である。

第3群土器(第24図10～17)は、前期後半諸磯b式土器の一群である。

10～13・17は櫛歯状工具により横位・縦位・弧状文を施文している。

14～16は半截竹管による横位・斜位方向の平行沈線を施文している。17は底部片である。

第4群土器(第24図18～21)は、前期後半諸磯b式～c式土器にかけての一群である。

18～20は口縁部破片である。18は地文に半截竹管による平行沈線文を施し、その上に結節浮線文を複数条直線や弧線施文されている。19～21は櫛歯状工具による櫛引き文である。19は耳状の把手である。21は肩部片である。

第5群土器(第24図22～28)は、前期後半諸磯c式土器の一群である。22・23はボタン状貼り付け文で地文が櫛歯状工具による櫛引き文である。24～26は櫛引きによる綾杉状文が、27・28は櫛引き文が施されている。

第6群土器(第24図29)は、前期後半十三菩提式土器である。

29は結節浮線文による同心円状モチーフが配されている。

第7群土器(第24図30～37)は、前期後半諸磯b式～c式にかけての縄文施文土器の一群である。30・31は無節L縄文。32・33は単節LR縄文。34～37は単節RL縄文である。

第8群土器(第24図38～43)は、前期後半興津式土器の一群である。

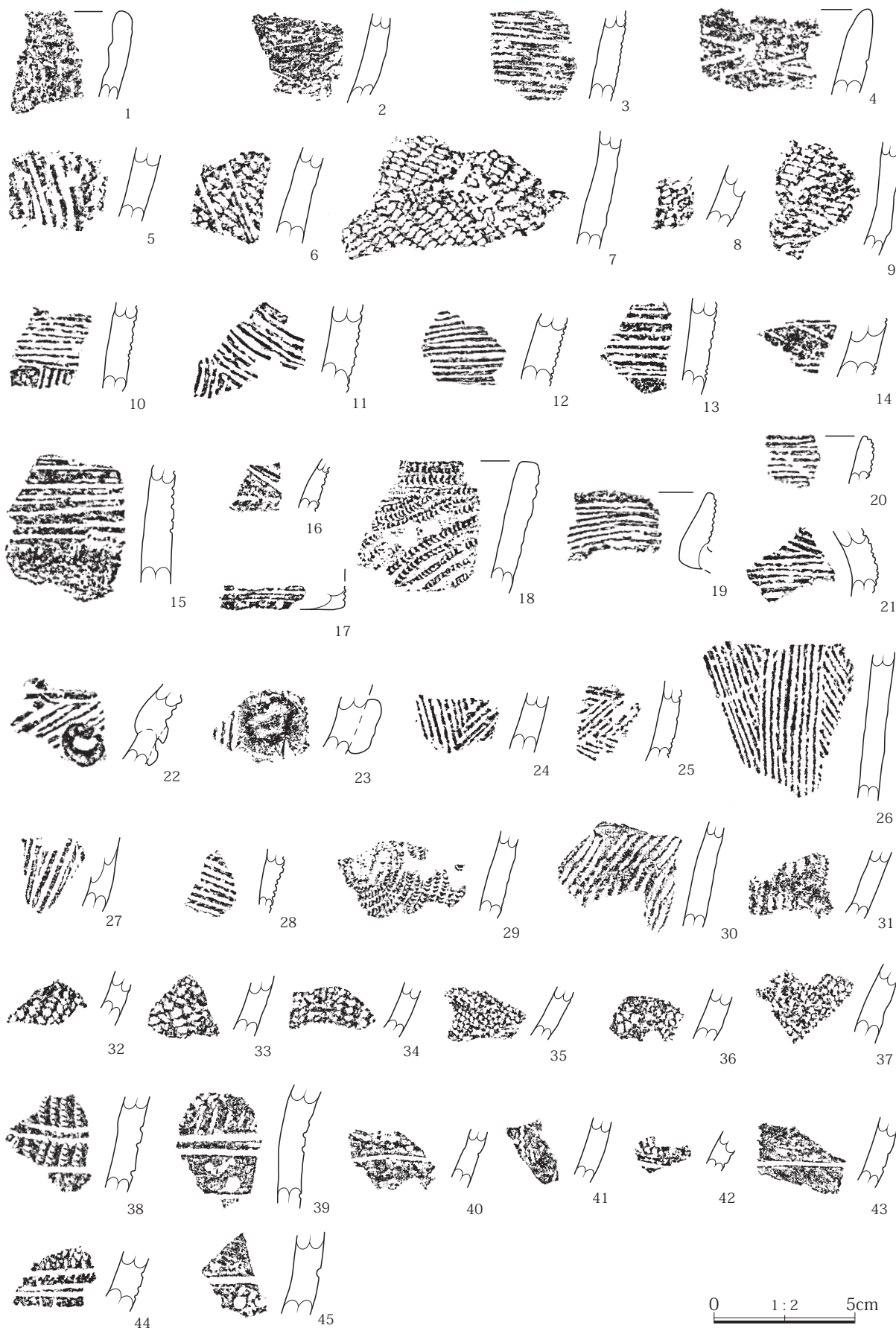
この土器群は現在の北関東茨城県を主とする土器で、胎土には石英を含み、在地の結晶片岩は一切含まれていない。特徴は二枚貝(ハイ貝等)の側縁部の圧痕を施したものである。38・39は半截竹管による平行沈線の上下に直行する貝殻の側縁部の圧痕を連続施文している。40・41は1条の横位沈線と平行に貝殻の側縁部の圧痕を施文している。42は半截竹管の平行沈線文の沈線に沿って貝殻の側縁部の圧痕を施文している。43は1条の横位沈線が施してある。

第9群土器(第24図44・45)中期の一群である。44は勝坂式土器で半截竹管による横位平行沈線に沿って半截竹管による刺突文を連続施文している。45は加曾利E式土器で横位沈線に区画された中を棒状工具による刺突文を連続施文している。

### 石器

石器は、剥片石器と礫石器に分けられる。

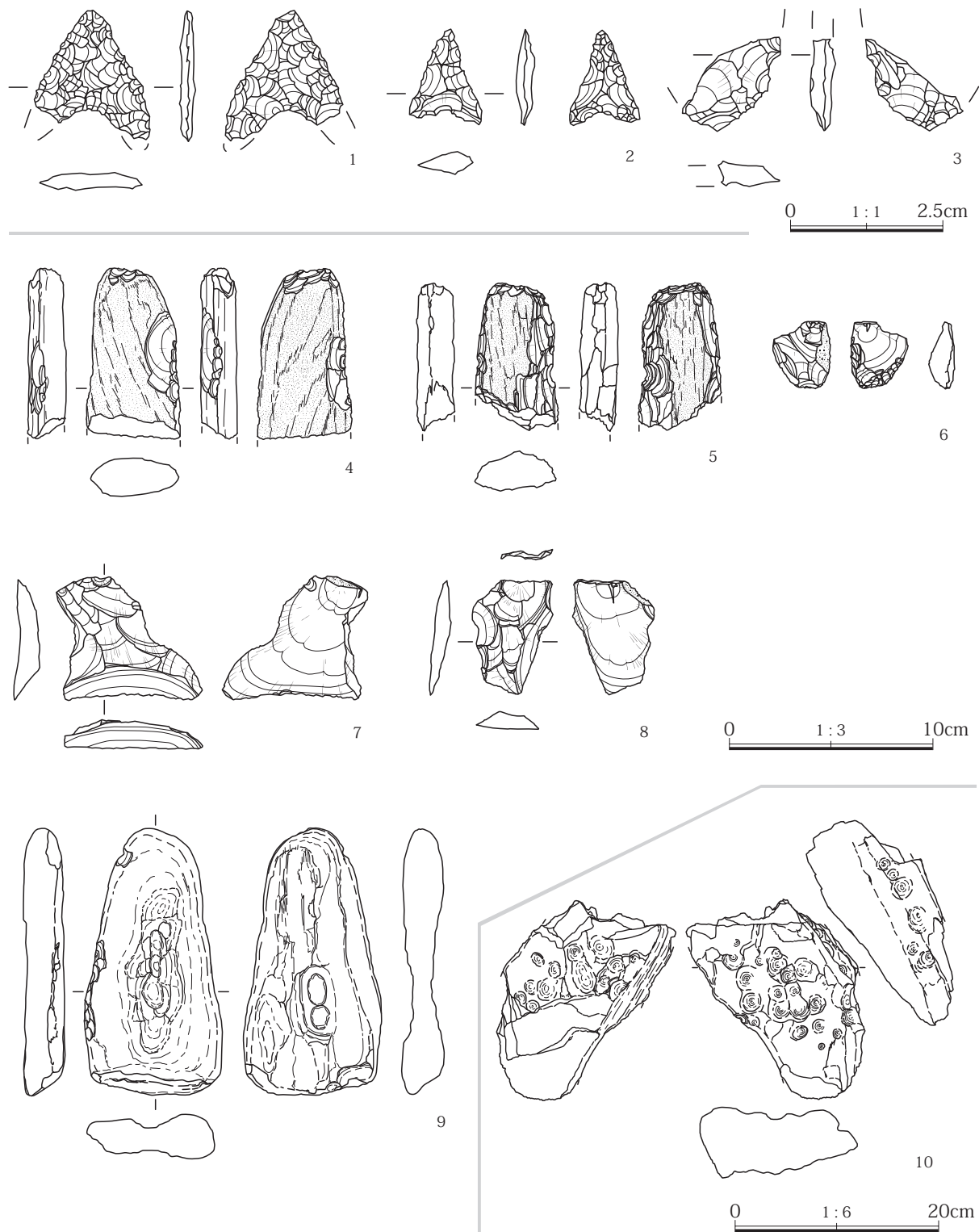




第 24 図 縄文土器拓影図

剥片石器としては、石鏃2点、尖頭器1点、打製石斧2点、削器1点、加工痕ある剥片1点、剥片30点、礫石器としては凹石1点、多孔石1点がある。合計39点の出土がある。

石材としては黒曜石16点、チャート9点、頁岩6点、ホルンフェルス4点、雲母片岩2点、緑色片岩2点が出土している（第7表）。



第25図 縄文石器実測図

縄文時代 出土石器一覧表 (第7表)

番号	縦 cm	横 cm	厚さ cm	重量 g	石質	種類	位置	図面番号
1	1.5	1.2	0.4	0.4	チャート	石鏃	66 墳	第 25 図 - 2
2	1.5	1.1	0.4	0.7	チャート	石槍	66 墳	第 25 図 - 3
3	2.0	2.8	1.0	5.9	チャート	剥片	66 墳	
4	1.1	1.5	0.3	0.3	チャート	剥片	66 墳	
5	4.4	4.4	0.7	10.8	ホルンフェルス	剥片	66 墳	
6	2.6	3.9	0.8	5.7	ホルンフェルス	剥片	66 墳	
7	5.4	4.2	1.4	19.0	頁岩	剥片	66 墳	
8	1.5	2.0	0.4	1.2	頁岩	剥片	66 墳	
9	3.0	1.5	0.5	1.7	黒曜石	剥片	66 墳	
10	2.4	1.5	0.5	1.2	黒曜石	剥片	66 墳	
11	2.2	1.5	0.5	1.0	黒曜石	剥片	66 墳	
12	1.7	1.9	0.3	0.9	黒曜石	剥片	66 墳	
13	1.9	0.8	0.5	0.6	黒曜石	剥片	66 墳	
14	1.5	1.6	0.3	0.3	黒曜石	剥片	66 墳	
15	1.8	1.0	0.3	0.2	黒曜石	剥片	66 墳	
16	1.0	1.3	0.3	0.2	黒曜石	剥片	66 墳	
17	0.6	0.8	0.1	0.1	黒曜石	剥片	66 墳	
18	6.1	7.1	1.4	38.4	ホルンフェルス	剥片	4 住	第 25 図 - 7
19	22.0	13.0	7.0	2,200.0	緑色片岩	多孔石	4 住	第 25 図 - 10
20	13.2	6.8	2.1	260.1	雲母片岩	凹石	4 住	第 25 図 - 9
21	8.4	4.6	1.8	114.4	緑色片岩	打製石斧	4 住	第 25 図 - 4
22	1.7	1.4	0.5	1.1	チャート	覆土	4 住	
23	1.7	1.9	0.4	0.6	チャート	覆土	4 住	
24	1.6	1.7	0.3	0.6	チャート	覆土	4 住	
25	3.3	2.8	1.3	8.5	頁岩	加工痕のある剥片	C 土坑	第 25 図 - 6
26	7.3	4.1	1.9	70.4	雲母片岩	打製石斧	表採	第 25 図 - 5
27	5.6	4.0	0.9	1.9	頁岩	剥片	表採	第 25 図 - 8
28	1.6	3.1	0.4	2.1	頁岩	剥片	表採	
29	4.6	2.6	1.3	12.9	頁岩	剥片	表採	
30	4.2	4.3	1.1	15.6	ホルンフェルス	剥片	表採	
31	2.1	1.9	0.3	0.9	黒曜石	石鏃	表採	第 25 図 - 1
32	2.2	1.4	0.6	1.9	黒曜石	剥片	表採	
33	2.2	1.9	0.5	1.2	黒曜石	剥片	表採	
34	1.6	1.6	0.6	1.0	黒曜石	剥片	表採	
35	2.1	0.9	0.4	0.6	黒曜石	剥片	表採	
36	0.8	0.5	1.5	0.1	黒曜石	剥片	表採	
37	0.9	0.5	0.2	0.1	黒曜石	剥片	表採	
38	0.9	1.7	0.2	0.3	チャート	剥片	表採	
39	1.1	1.1	0.2	0.2	チャート	剥片	表採	



### 第3節 旧石器時代

長沖古墳群県調査分C区(大谷1999)で、176号墳(村後3号墳)出土の黒曜石製のナイフ形石器1点(第26図1)の出土があり、旧石器時代の発見される可能性がある。本地点においても古墳の周溝から黒曜石の小破片があり、旧石器時代の可能性を推測することができた。

このようなことから調査区域の中央に東西5m、南北7mの範囲に試掘を試みた(第28図)。

調査の結果、北西隅で深さ1mの浅間一板鼻褐色軽石層(BPユニット層)のところからチャート製の小剥片が出土した。

この他、ローム中に含まれる石はすべてチェックして取り上げたが、1点だけチャート製の小剥片が含まれており、合計2点が石器であった。この剥片は両方とも打面・打点が残されているもので、人工的に母岩から剥離されたものである。

この石器群は、始良Tn火山灰(AT層)下層に存在したものが上下移動したものと考えられる。

2点の石器は、チャート製で、色合い・質感が同じであり、同一個体である(第29図1・2)。

1はチャート製剥片で縦1.7cm、横1.3cm、厚さ0.35cm、重さ0.6gである。

2はチャート製剥片で縦0.9cm、横0.9cm、厚さ0.15cm、重さ0.1gである。

この石器群は群馬県では、平面で5m前後の範囲で石器群の発見されることが通常であり、石器の広がりがあった可能性がある。

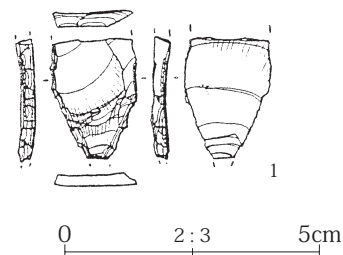
AT層の年代は、今まで2万4千年～2万5千年前ころと言われていたが、最近の年代観で3万年前の年代とされる研究発表がされている。

関東ローム層中から出土した石についてはすべて取り上げている。

これらの石についても石材鑑定を行ったので第8表にまとめる。

石器であるチャート製の石器剥片2点の他は、次の通りである。玉髓1点、雲母片岩5点、石英4点、石英片岩2点、緑色岩1点、緑色片岩2点の合計17点である(写真図版6右下写真)。

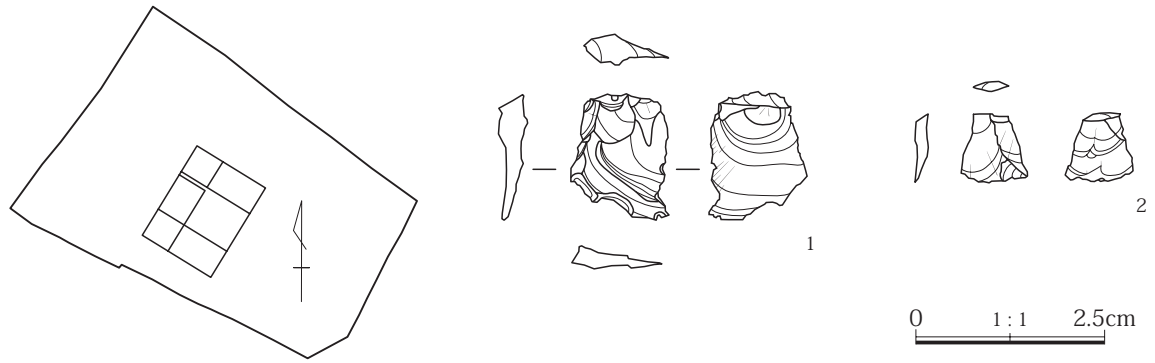
なお、これらの石群は人工的な石器ではない。



第26図 C区出土ナイフ形石器

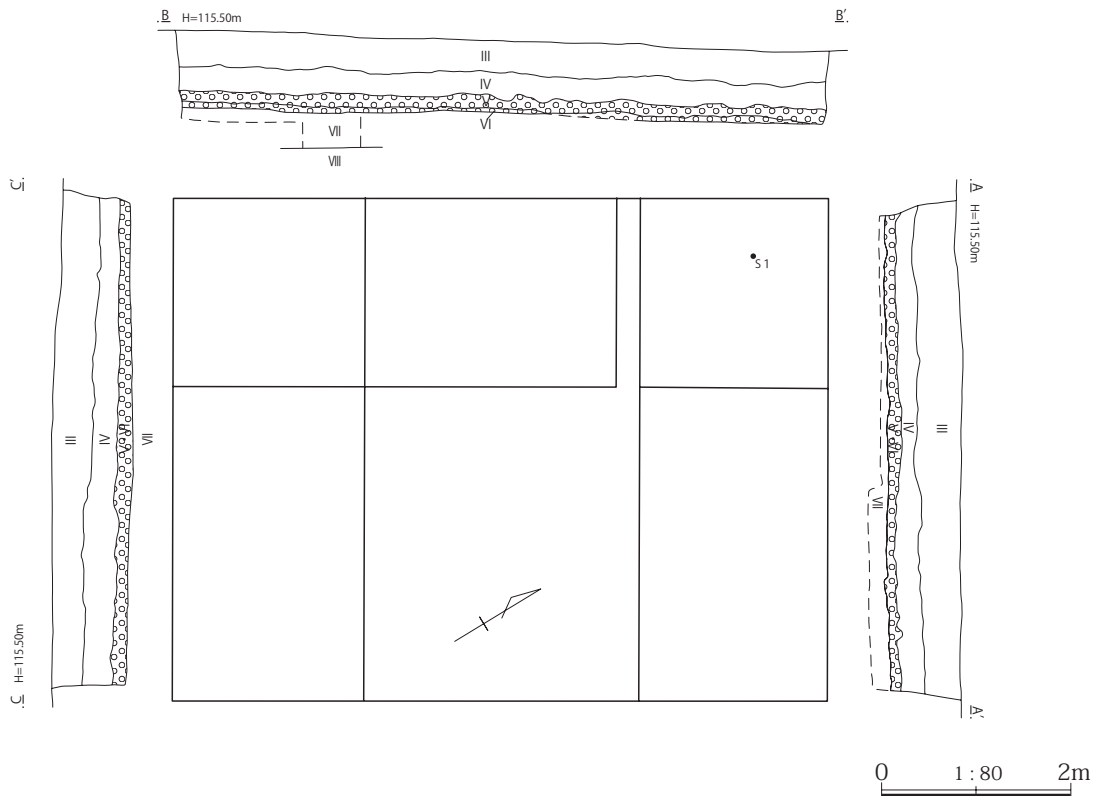
ローム中 出土自然石一覧表 (第8表)

番号	縦 cm	横 cm	厚 cm	重量 g	石質	備考
1	4.8	2.9	1.1	14.4	玉髓	
2	4.4	2.9	1.4	25.9	雲母片岩	
3	2.9	2.4	1.5	12.4	雲母片岩	
4	3.0	1.8	0.6	4.1	雲母片岩	
5	1.5	2.0	1.1	2.2	雲母片岩	
6	1.1	0.9	0.3	0.4	雲母片岩	
7	2.0	0.9	0.5	1.1	石英	
8	1.6	1.2	0.8	1.4	石英	
9	1.3	1.0	0.5	0.6	石英	
10	0.8	0.7	0.4	0.2	石英	
11	2.6	1.9	1.3	4.8	石英片岩	
12	1.7	1.0	0.9	1.4	石英片岩	
13	1.2	1.0	0.5	0.4	緑色岩	
14	1.6	1.9	0.6	2.2	緑色片岩	
15	0.9	0.6	0.2	0.1	緑色片岩	



第 27 図 調査区の試掘位置図

第 29 図 旧石器時代出土石器実測図



第 28 図 旧石器時代試掘調査平面図・土層断面図

- I 耕作土
- II ローム漸移層：ローム粒子を混入縮まりは弱い。古墳のマウンド下の地層であり、旧地表が残っている。
- III 黄褐色土層：ローム層で良く締まっている。上下2層に分けられる。下半がやや黄色味が強い。黄色いパミス5mmが点在している。なお、板鼻黄色パミスの純層は認められない。
- IV 黄暗褐色土層：ローム層で良く締まっている。III層のローム層より茶色が強い。  
IV層の中には、部分的に炭化物が含有している。この集中が認められる箇所あり。
- V 浅間一板鼻褐色軽石層：部分的に層序が異なっている。条件の良いところでは上層に灰色の強い一定厚さでパミス層が、下層にはオレンジ色の粘質の強いパミスが認められる。一部にはこの中間に3cmくらいの粘土層を認めることができる。上下層が逆転している場合もある。この層は上下方向に大きな動きのあることがわかる。このパミス層はAs-室田パミス層という。これらをB Pユニット層という。  
始良T n火山灰(AT)がV層の下限に通常存在する。
- VI 灰白色粘土層：茶褐色の斑点が混入。非常に粘性があり、縮まりも強い。
- VII 灰色粘土層：灰色粘土層を主体に茶褐色の縦方向に伸びる幾つもの筋が斑模様のように見ることができる。この層を水平に削ると日照りで起きるひび割れ状況であることが確認できた。
- VIII 白灰色粘土層：最下層は白色粘土層である。純粋に粘土層であり、20cmは同一層であると確認した。その下層は未確認である。

※なお、V層についての地層は、群馬県藤岡市北山遺跡と対比できる内容であると大工原豊氏より御教示を得た。

## 第4節 その他

### 柱穴列

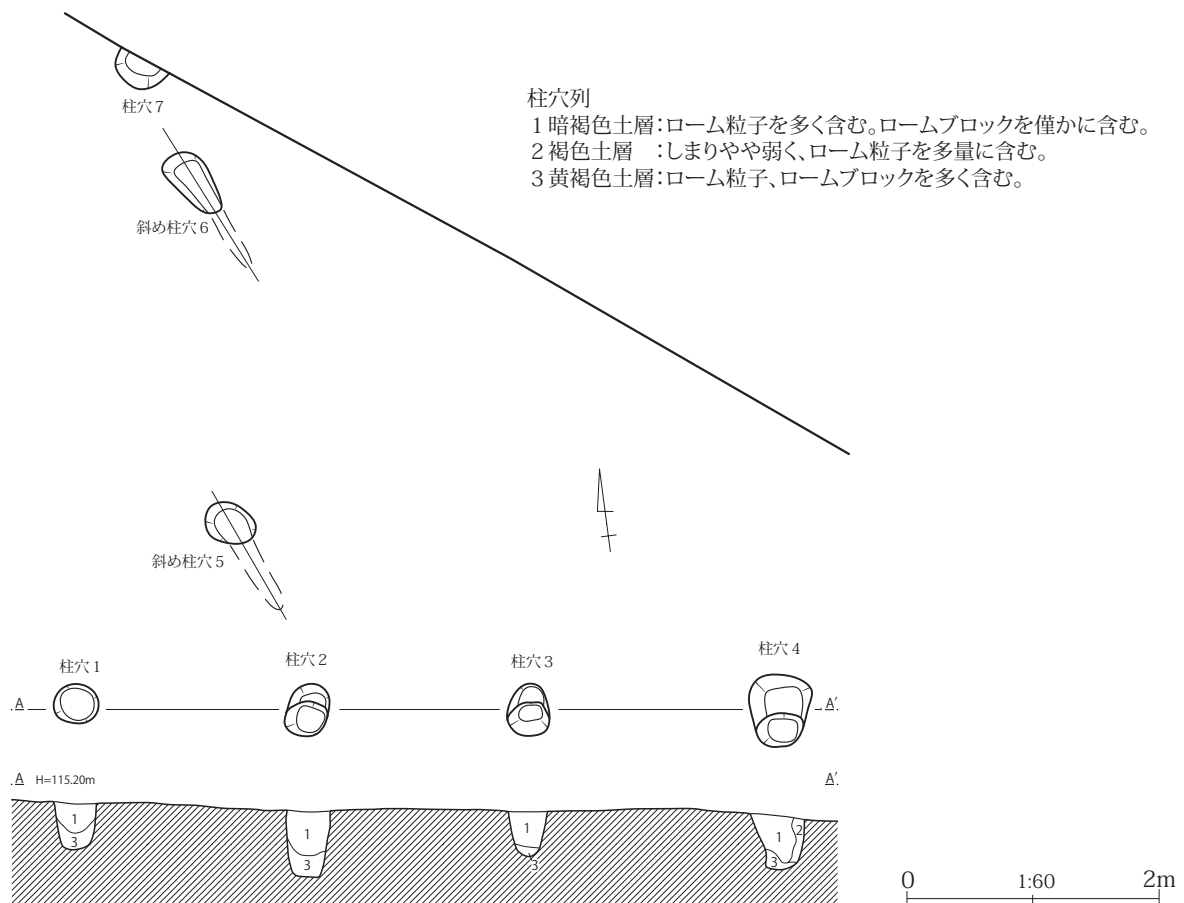
柱穴1から柱穴4の柱4本の並びは、直線で東西の主軸ラインE - 8° - Sで並んでいる。

ほぼ等間隔で掘立柱建物の柱穴を推定し、柱穴1と柱穴4の柱列に直行する柱穴の検出を試みたが、その存在はなく掘立柱建物の可能性はなくなり、四本の柱穴のみの単独遺構となる。遺構としては柵跡ということになる。柱穴列の長さは6mであり、柱穴の心身距離は各々1.8mである。

なお、西側の柱穴1の1本を基準に東側3本は柱の掘り直しが行われている。3本とも南側に深い掘り直し穴が存在する。元々の主軸ラインはE - 7° - Sである。

柱の大きさは、柱穴1は平面が円形で南北30cm、東西35cm、深さ44cm。柱穴2は平面が楕円形で南北43cm、東西32cm、深さ40cmと54cm。柱穴3は平面が楕円形、南北42cm、東西35cm、深さ32cmと35cm。柱穴4は平面形、南北57cm、東西50cm、深さ46cmと55cmである。

出土遺物はなく時期不明・性格不明である。



第30図 柱穴列平面図・同土層断面図及び斜め柱穴平面図

### 斜め柱穴

柵列に直行する形で2本の斜め柱穴が掘られている。手の届く範囲で調査しているが、各々あと40～50cmは掘削してあることをピンポールで刺して確認。人工的に掘られたものであるが、性格は不明である。

斜め柱穴5・6の大きさは次のとおりである。

柱穴5は確認面の平面形は楕円形で、大きさは東西38cm、南北32cmである。

穴の底までは調査できなかったが、調査したのは腕の長さ70cmでそれより、さらに50cmは掘り進めることができることを確認する。この穴の斜め角度は30度である。穴の長さは1.2mある。主軸方位はN-22°-Wである。

柱穴6は確認面の平面形は長楕円形で、大きさは東西35cm、南北57cm、である。

穴の底までは調査できなかったが、調査した腕の長さ70cmでそれより、さらに40cmは掘り進めることができることを確認する。この穴の斜め角度は40度である。穴の長さは1.1mである。主軸方位はN-25°-Wである。

柱穴5、6の配置は心身で2.8mである。北側調査区外柱穴存在の有無によっても、もう少し検討する余地が生まれる。

その他小穴を17箇所確認しているが、すべて浅く性格は不明である。

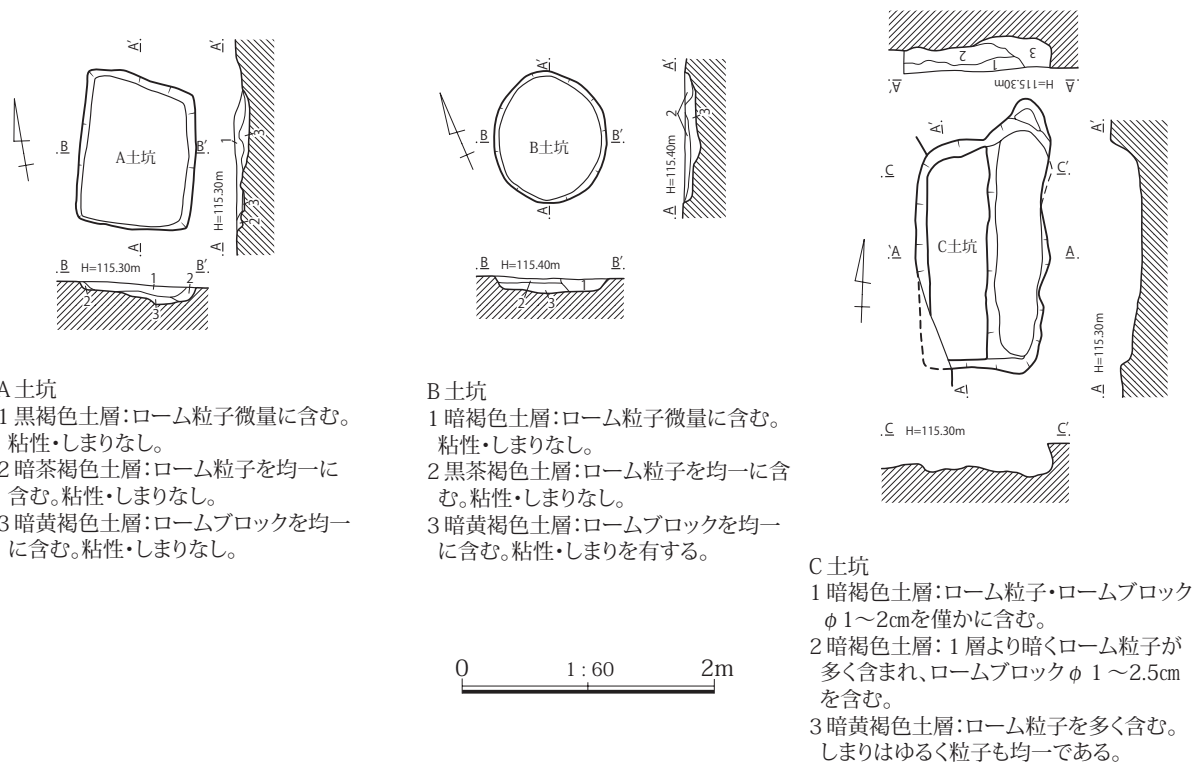
## 土坑

土坑はA・B・C土坑の3基が存在する。

### 土坑A

土坑Aは、4号住居跡と66号墳の間に位置する。平面形は長方形で主軸はN-10°-Eである。大きさは南北122cm、東西94cmで遺構確認面は関東ローム層で確認できた。深さは16cmでローム層はあまり掘削していない。覆土は3層である。

床面は、関東ローム層で平らである。出土遺物は、土師器甕口縁部破片1点の出土があった。



第31図 土坑平面図・同土層断面図

## 土坑B

土坑Bは、66号墳と1号住居跡との間で66号墳から西に50cm離れている。遺構確認面はローム層より上層の暗褐色土層中であり、平面形は円形で大きさは東西90cm、南北104cm、深さ14cmである。

床面は関東ローム層で皿状である。覆土は3層である。

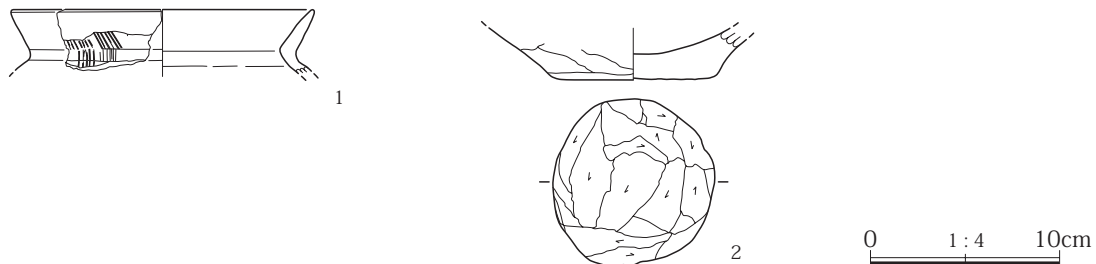
出土遺物はなく、時期は不明である。

## 土坑C

土坑Cは、4号住居跡と重複関係にある。平面形は不定形である。

4号住居跡の北東側に重複して存在し、その重複関係は4号住居跡が古く、本土坑が新しいものである。主軸は真北あり、西壁は確認できないが、現状の大きさは東西1.1m、南北2.2mと1.84mである。なお、東側には南北より大きく東壁がオーバーハングした壁が存在している。土層での明確な変化を見ることができなかつたが、2つの遺構の合併形と考えることもできる。一つは東側の遺構は南北2.2m、東西48cm、深さ24cmの長楕円形と認識することもできる。もう一つの土坑は、平面形が南北1.84m、東西は60cmである。

出土遺物は、土師器破片20点、石器剥片1点、鉄破片1点の出土があつたが、4号住居跡の出土品をC土坑出土遺物として処理されているものが見られた。鉄破片は鉄製品の形状を示していない非製品である。時期は不明である。



第32図 土坑出土土器実測図

A土坑 出土遺物観察表 (第9表)

( ) 推定数値 [ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
1	甕	覆土	(16.0)	-	[3.2]	砂粒	良好	橙	頸部に口縁側からは斜方向頸部に縦方向のハケ目が施される。	口縁部破片

C土坑 出土遺物観察表 (第10表)

( ) 推定数値 [ ] 残存数値

番号	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
2	甕	覆土	-	8.5	[3.0]	砂粒	良好	橙	底部のへラケズリ整形が顕著。	底部のみ



## 第5章 自然科学分析

長沖古墳群久保地区 D 地点 1 号住居跡出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長沖古墳群久保地区 D 地点では、炭化材を伴う古墳時代前期の 1 号竪穴住居跡が検出されている。1 号住居跡は、以前にも南側の調査が行われており、垂木などと考えられる炭化材が住居の中央から外側に向かって放射状に検出され、火災住居跡であることが確認されている。今回の住居北側の調査では検出した炭化材は、南側と同じく放射状に伸びる炭化材が出土している。

本報告では、木材利用を検討するために、炭化材の樹種同定を実施する。

### 1. 試料

試料は、1 号住居跡から出土した炭化材 6 点 (炭 1 ~ 6) である。

### 2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

### 3. 結果

樹種同定結果を第 11 表に示す。炭化材は、広葉樹 2 分類群 (ネムノキ・ムクロジ) に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ネムノキ (*Albizia julibrissin* Durazz.)  
マメ科ネムノキ属

試料は全て年輪界で割れて、板目板状

の破片になっている。環孔材で孔圏部は 3 ~ 5 列、孔圏外でやや急激に径を減じた後、単独または 2 ~ 3 個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1 ~ 2 細胞幅、1 ~ 20 細胞高。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圏部は 1 ~ 3 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1 ~ 3 細胞幅、1 ~ 40 細胞高。柔組織は周囲状~連合翼状、帯状およびターミナル状。

樹種同定結果 (第 11 表)

遺構	時期	試料	状態	種類
1 号住居跡	古墳時代前期	炭 1	破片	ネムノキ
		炭 2	破片	ネムノキ
		炭 3	破片	ネムノキ
		炭 4	破片	ムクロジ
		炭 5	破片	ネムノキ
		炭 6	破片	ネムノキ

#### 4. 考察

1号住居跡の北側の床面から出土した炭化材は、炭1、炭4、炭6が住居の外側に向かって放射状に出土しており、垂木の可能性がある。炭2,3,5は、炭1の周囲から出土している。分析試料として採取された炭化材は、いずれも破片で、年輪界で割れているものも多く、元の形状・木取りは不明である。これらの炭化材は、ネムノキとムクロジに同定された。

ネムノキは、二次林の林縁部や水辺等に生育する落葉高木で、木材はやや軽軟で強度と耐朽性は低いとされる。ムクロジは、山地・丘陵地等に生育する落葉高木で、木材はやや重硬な部類に入る。

出土状況と樹種同定結果をみると、炭1,2,3,5は、狭い範囲に集中し、樹種(ネムノキ)および軸方向が同一であることから、元は同一部材に由来する可能性がある。一方、同じネムノキに同定された炭6は、間に炭4を挟んで炭1,2,3,5から1m以上離れており、軸方向も異なることから別部材と考えられる。したがって、1号住居跡北側から出土した炭化材は、3部材に2種類が利用されたことが推定される。

伊東・山田(2012)のデータベースによれば、本遺跡周辺では古墳時代初頭の住居跡出土炭化材の樹種を明らかにした例は認められない。比較的近い時期の資料としては、大久保山遺跡IV区(本庄市)の弥生時代後期とされる住居跡から出土した垂木などと考えられる炭化材がクヌギ節とコナラ節に同定されている。一方、埼玉県内の古墳時代初頭～前期の住居跡出土炭化材の樹種を同定した例をみると、尾ヶ崎遺跡および風早遺跡(旧庄和町)、中原後遺跡(浦和市)、富士前遺跡(志木市)でクヌギ節やコナラ節を主体とする結果が報告されており、大久保山遺跡の弥生時代後期の資料と同様の木材利用がみられる。なお、羽折遺跡(鶴ヶ島市)では、カエデ属、コナラ節、カキノキ属が確認されており、県内の同時期の資料とは異なる木材利用傾向が確認される。

今回の結果は、上記のいずれの遺跡とも木材利用傾向が異なる。ただし、住居北側の3部材のみの結果であり、屋根を支えるのに強度が必要なことを考慮すれば、住居全体では他遺跡と同様にクヌギ節・コナラ節等の強度が高い木材を利用していた可能性もある。住居南部の炭化材は残っていないことから、周辺地域で同時期の建築部材の木材利用について調査例を蓄積し、その中で検証していくことが重要である。

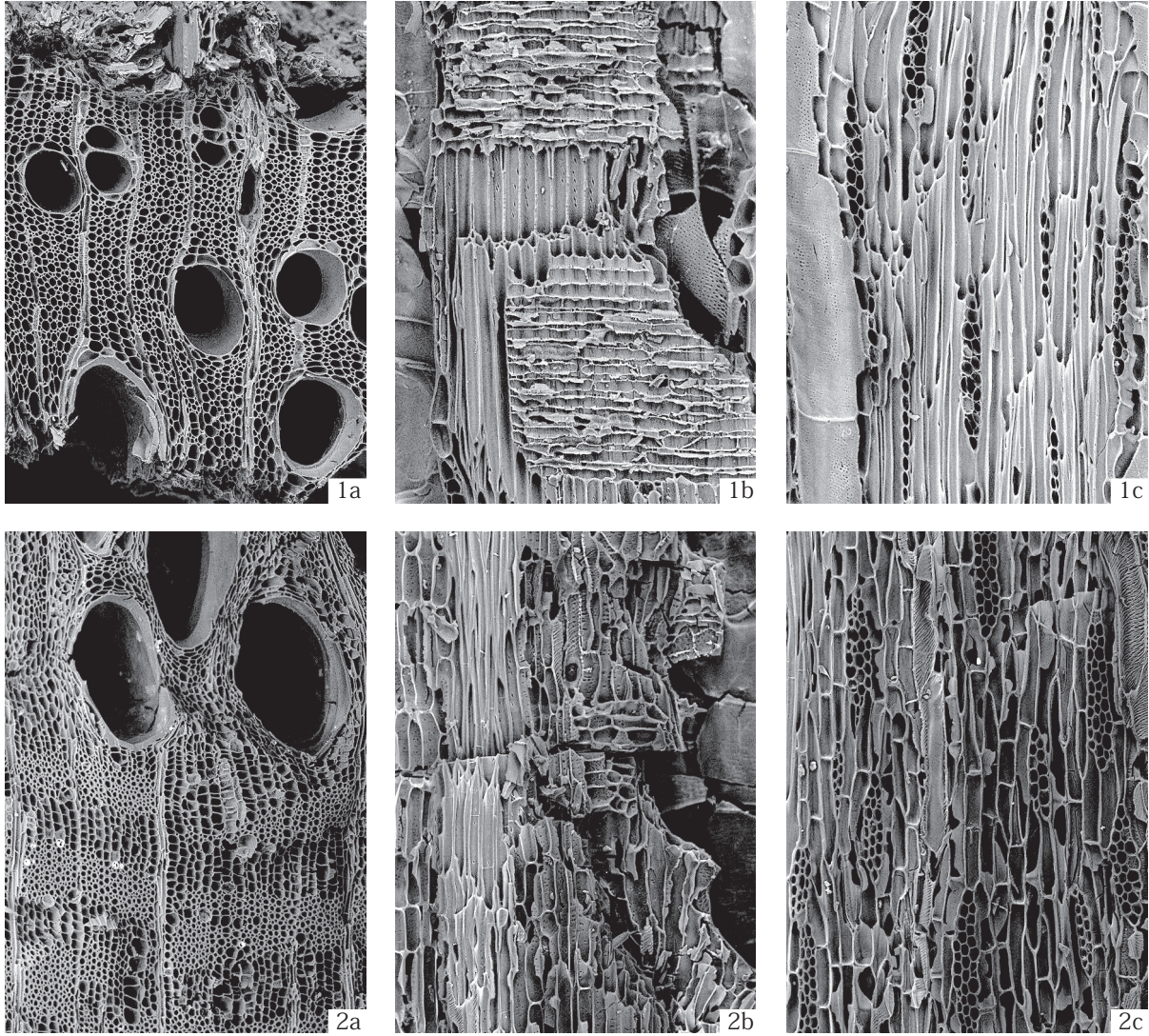
(高橋 敦)

#### 引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社,449p.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

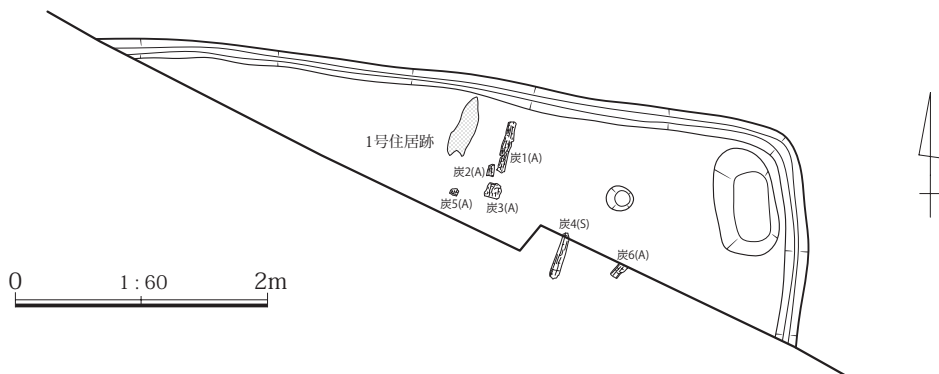


図版 炭化材顕微鏡写真



1. ネムノキ(SI-1;炭1)  
 2. ムクロジ(SI-1;炭4)  
 a:木口,b:柁目,c:板目

100 μ m a  
 100 μ m b,c



試料番号の後の( )内がAはネムノキ、Sはムクロジを示す。

第33図 1号住居跡における炭化材の出土状況と樹種

## 第6章 まとめ

本遺跡からは、古墳時代・縄文時代・旧石器時代の遺構・遺物が認められた。

### ○古墳時代前期の集落

古墳時代は、前期の集落遺跡が確認されている。埼玉県埋蔵文化財調査事業団の県道拡幅工事前調査において、竪穴式住居跡がD区で2軒、E区で3軒、第7次調査で3軒と本調査で7次調査の1号住居跡の未調査部分と4号住居跡で合計9軒の集落が確認された。

この集落の範囲は北西側の小河川と東南側の埋没谷部に挟まれた幅100mの台地上の範囲で集落をとらえることができ、南側は100m位で南限を予測できる。北側にどの程度広がりをも認めることが今後の課題である。また、北側の丘陵先端付近は隣接して方形周溝墓群の墓域が想定されている。

古墳時代の竪穴式住居跡は、1号住居跡1軒は典型的な焼失住居である。

4号住居跡の遺物出土状況はすべて床直遺物ではなく、屋根が崩落後に竪穴式住居跡のくぼ地に土器や石類を廃棄したものである。廃棄時期は土器類が同一時期であることから一気に廃棄したものと考えられる。

古墳の築造に必要な石材を大量に使うのとは違い、古墳時代前期の集落の住居内に石が多く出土している。何かの意図をもって、人為的に川から石を選定して持ち込まれている。これらの多くの石については、今後調査検討する必要があるかもしれない。

また、第7次調査において3号住居跡出土品として高坏・小形の台付甕と共に吉ヶ谷式系の壺が出土している。4号住居跡も同じように在地の弥生時代後期の吉ヶ谷式の系譜を引く土器がまだ残っている。同じく群馬県の弥生時代後期樽式土器が残っており、古式土師器である古墳時代前期土器(石田川式の台付甕)、東海東部の大廓式と思われる壺なども近くで出土しており、弥生時代から古墳時代への過渡期であることがわかり、これらの共存関係・交流に大変興味をもたれる。

なお、1号住居跡は焼失家屋で建築構造材が炭化している。その炭化材の樹種同定を行った結果は、ネムノキとムクロジが確認された。ムクロジは南の植物で埼玉県本庄市が北限域と考えられ、ネムノキもこの地域の樹種鑑定には発見例がない木である。このように樹種同定により、遺跡のおかれた自然環境に新しい発見もあり、具体的に総合的な社会復元ができる。

### ○長沖古墳群 第66号墳

66号墳は、昭和58年度に本調査が行われ、主体部も調査されている。今回は北西部の周溝調査だけであるが、その部分が南西部周溝より幅広であり、部分的に深く掘削してある。

また、その中で周溝外側の底面から壁面を使い土坑が掘られていた。いわゆる、特異な位置に埋葬施設を持つ事例ではないかと思われるが、後期古墳には今まで発見例はない。長沖古墳群においても初めての事例である。今後の調査事例の増加に期待したい。

環状1号線建設に伴う事前調査で66号墳の谷をはさんで東側にある158号墳までは発掘調査で古墳が存在していないことが確認されている。また、県道の拡幅工事で県が調査したC区北側、D区・E区には古墳の存在がなかった西側の谷部分にかけては古墳の存在はほぼないことが考えられる。

このことから、西側はほぼ古墳群の限界を示しているもので、66号墳の東隣接地は埋没谷が南北に走っており、古墳群としては完全に隔絶した状況を作っている。



今後の調査によれば北側と南西方向にまだ広がる区域を残しているが、66・65・67・159・160号墳の5基は長沖古墳群の中で小規模な支群を形成している。

#### ○縄文時代

縄文時代の遺構は存在しなかったが、早期末から中期土器の出土があった。前期土器の中に北関東東部の茨城県方面の興津式土器の出土があった。興津式土器の特徴は二枚貝の側縁を土器面にスタンピングしてギザギザ模様を縦方向・横方向に施文したものである。

縄文前期前半の植物繊維を胎土に含む黒浜式期、前期後半の諸磯C式の集合沈線で文様構成された一群、先の興津式土器、縄文中期加曾利E式土器が出土している。

石器としては石鏃、尖頭器、打製石斧、くぼみ石、多孔石などが出土しており、近くに遺構があったことが窺える。

黒曜石剥片の出土が多いが、石製品の出土がなかった。

但し、チャート製のポイントの出土があることから、縄文時代草創期から旧石器時代の後期後葉の時期の文化層があったことも考えられる。

#### ○旧石器時代

旧石器時代は、主要地方道秩父・児玉線の拡幅工事に伴う埼玉県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査において、本遺跡の南西160mの地点で黒曜石製のナイフ形石器1点の出土があった。本丘陵調査地においても旧石器時代の石器の出土が認められるかローム層中の試掘調査を行った。その結果、先のナイフ形石器とは異なった時代、AT層下（始良・丹沢火山灰）でチャート製の小剥片2点の出土があった。石器の広がりを確認するまでには至らなかったが複数の剥片が発見された事は石器の広がり存在した可能性がある調査であった。

この丘陵において、旧石器時代の石器の存在を明らかにできたことは、原位置で認められたことを含め最大の発見でもある。

また、BPユニット層中の発見であったが、地層の乱れは大きくAT層下の石器であることが指摘された。AT層下の石器は本庄市内で一番古い石器ということになる。

AT層（始良・丹沢火山灰）の年代は、通常24,000～25,000年前とされている。

なお、最新の研究では※福井県水月湖の堆積層「年縞」の研究で、AT層の年代を約30,009年前と具体的にした研究も進んでいる（註a）。

#### ○その他

その他として、柱穴列と斜め柱穴・土坑が存在した。柱穴列は4穴が等間隔で直線に並び掘立柱建物を想定させたが、四角に柱が並ぶことはなかった。斜め柱穴は30度くらいの斜度で柱穴が1.5mもあり、動物の巣穴かとも考えられたが今後の資料の増加を待ちたい。

（大塚昌彦）

#### 註

註a 2012年に福井県の水月湖の湖底に堆積している土の層「年縞」が「地質学的年代決定」の世界標準となった。「年縞」とは、湖底には春から夏にかけてプランクトンの死骸や珪藻類が繁殖堆積して白い層になる。秋から冬には粘土鉱物が体積して黒い層ができる。樹木の年輪同様1年経過する毎に一对の筋が形成され縞模様が連続出来上がっている。水月湖には「縞」が7万年分残っていた。



## 参考文献

- 菅谷浩之 1980 『長沖古墳群』 児玉町文化財調査報告書 第1集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 1984 「長沖古墳群の第7次調査」 『第17回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会
- 大谷 徹 1999 『長沖古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第234集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木徳雄ほか 2007 『長沖古墳群Ⅶ』 本庄市遺跡調査会報告書 第14集 本庄市遺跡調査会
- 鈴木徳雄ほか 2011 『長沖古墳群Ⅹ』 本庄市遺跡調査会報告書 第41集 本庄市遺跡調査会
- 大熊季広ほか 2002 『長沖古墳群Ⅲ』 児玉町文化財調査報告書 第36集 児玉町教育委員会
- 大熊季広ほか 2003 『長沖古墳群Ⅳ』 児玉町文化財調査報告書 第37集 児玉町教育委員会
- 大熊季広ほか 2004 『長沖古墳群Ⅴ』 児玉町文化財調査報告書 第38集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦ほか 2006 『長沖古墳群Ⅵ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第2集 本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦 2008 『長沖古墳群Ⅶ』 本庄市遺跡調査会報告書 第21集 本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦 2011 『長沖古墳群Ⅸ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第24集 本庄市教育委員会
- 恋河内昭彦 2012 『長沖古墳群Ⅺ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第27集 本庄市教育委員会
- 的野善行 2014 『長沖古墳群Ⅻ 女池遺跡Ⅳ 西富田遺跡Ⅱ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第36集 本庄市教育委員会
- 太田博之 2012 『長沖古墳群ⅩⅢ』 本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書 第39集 本庄市教育委員会
- 阿部正功・大野延太郎・鳥居龍蔵 1895 「秩父地方に於ける人類学的旅行」 『東京人類學會雜誌』 第10巻 第110號 東京人類學會
- 坂本和俊ほか 1990 『秋山古墳群 - 庚申塚古墳・諏訪山古墳の調査 - 』 児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会 児玉町史資料調査報告 古代 第2集
- 志村 哲・大工原 豊 1988 「藤岡北山遺跡」 『群馬県史 資料編 1 原始古代1 旧石器・縄文』 群馬県 135～142頁
- 利根川章彦 1994 「六 東国の群集墳」 『古代を考える 東国と大和王権』 吉川弘文館
- 本庄高等学校考古学部 1975 「児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究」 『いぶき』 8・9合併号
- 県立さきたま資料館 1994 『埼玉県古墳分布調査報告書』 埼玉県教育委員会
- 杉崎茂樹 1989 「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」 『古代』 87号
- 塩野 博 1999 「埼玉の古墳—その発掘と研究の歴史（その3）—」 『埼玉考古』 第34号
- 増田逸朗 1995 「北武蔵における初期横穴式石室導入期の様相」 『調査研究報告』 第8号 県立さきたま資料館
- 増田逸朗 1996 「模様積石室小考」 『調査研究報告』 第9号 県立さきたま資料館

# 写真図版

## 写真図版 目次

- |      |   |       |  |
|------|---|-------|--|
| 図版 1 | 久保地区D地点全景（北から）<br>久保地区D地点全景（西から）  | 図版 6  | ローム層標準土層<br>ローム層中石器出土状況<br>ローム層中カーボン集中個所<br>ローム層中石器出土状況<br>ローム層中発掘調査風景<br>VII層中の土層断面と平面<br>A T層下出土剥片（1/1）<br>ローム層中の自然石 |
| 図版 2 | 1号住居跡 全景（北東から）<br>1号住居跡 炭化材・焼土・出土遺物<br>1号住居跡 貯蔵穴<br>1号住居跡 土層断面<br>1号住居跡 掘り方完掘                                     | 図版 7  | A土坑<br>B土坑<br>C土坑<br>柱穴列跡<br>柱穴列と斜め柱穴<br>柱穴4<br>斜め柱穴5<br>斜め柱穴6   |
| 図版 3 | 4号住居跡 遺物出土状況<br>4号住居跡 土層堆積状況<br>4号住居跡 完掘状況<br>4号住居跡 掘り方完掘状況（西から）<br>4号住居跡 掘り方完掘状況（北から）                            | 図版 8  | 4号住居跡出土土器  |
| 図版 4 | 66号墳周溝内遺物分布状況（西から）<br>66号墳周溝内遺物分布状況（北東から）<br>66号墳周溝完掘状況（西から）<br>66号墳西側周溝土層断面状況（北から）<br>66号墳周溝内発掘調査風景              | 図版 9  | 1号住居跡出土土器<br>A土坑出土土器<br>C土坑出土土器<br>66号墳周溝出土土器<br>表採埴輪片<br>66号墳周溝出土土器<br>4号住居跡出土礫石材鑑定                                   |
| 図版 5 | 66号墳周溝内土坑<br>66号墳周溝内土坑土層断面<br>66号墳周溝内土坑<br>66号墳周溝内土坑<br>66号墳周溝土層断面<br>66号墳周溝内土坑土層断面<br>66号墳北側石集積個所<br>66号墳北側石集積個所 | 図版 10 | 縄文時代出土土器<br>（38～42 貝殻復縁文）  |
|      |   | 図版 11 | 縄文時代出土石器   |





久保地区D地点全景（北から）



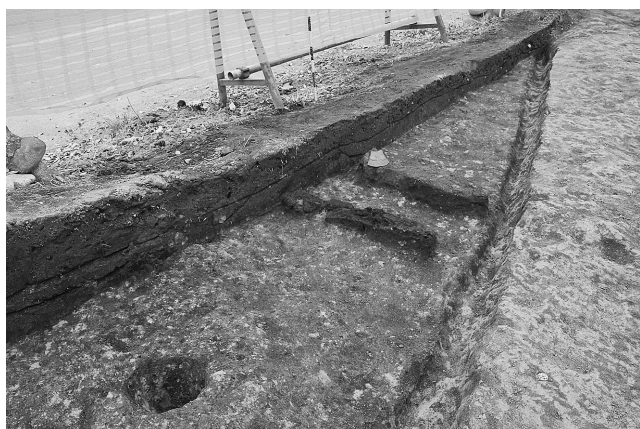
久保地区D地点全景（西から）



## 図版 2



1号住居跡 全景（北東から）



1号住居跡 炭化材・焼土・出土遺物



1号住居跡 貯蔵穴



1号住居跡 土層断面



1号住居跡 掘り方完掘





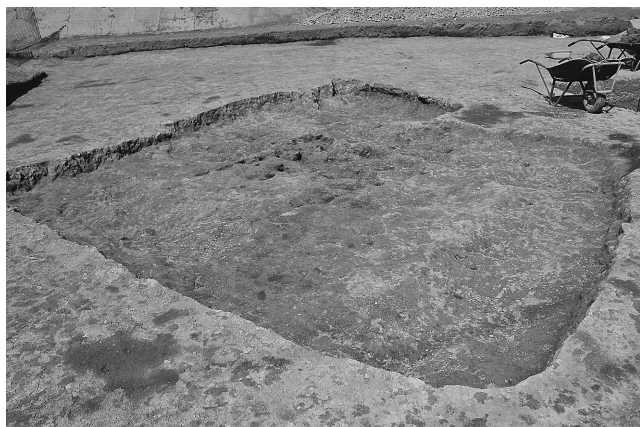
4号住居跡 遺物出土状況



4号住居跡 土層堆積状況



4号住居跡 完掘状況



4号住居跡 掘り方完掘状況（西から）



4号住居跡 掘り方完掘状況（北から）



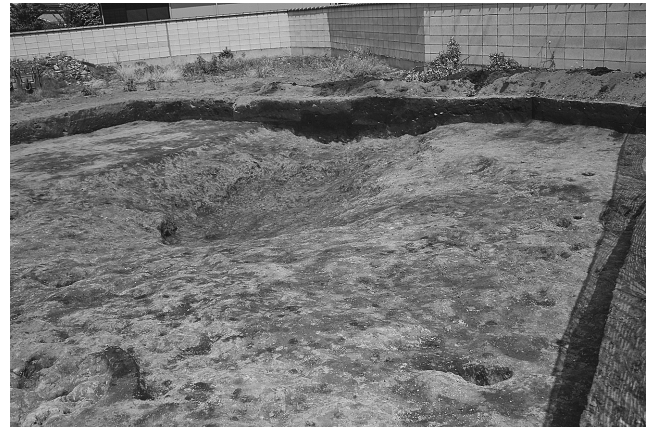
図版 4



66号墳周溝内遺物分布状況（西から）



66号墳周溝内遺物分布状況（北東から）



66号墳周溝完掘状況（西から）



66号墳西側周溝土層断面状況（北から）

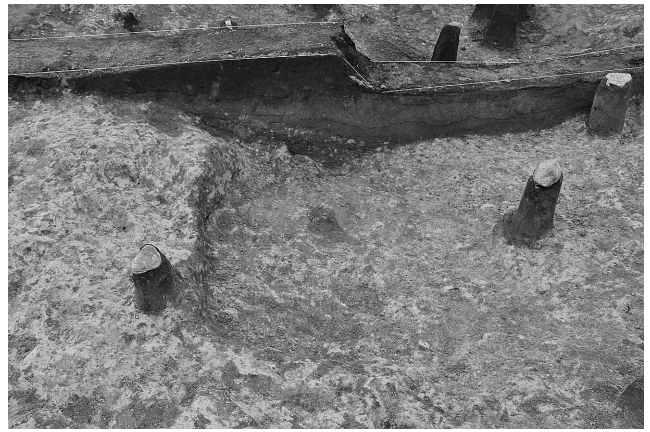


66号墳周溝内発掘調査風景

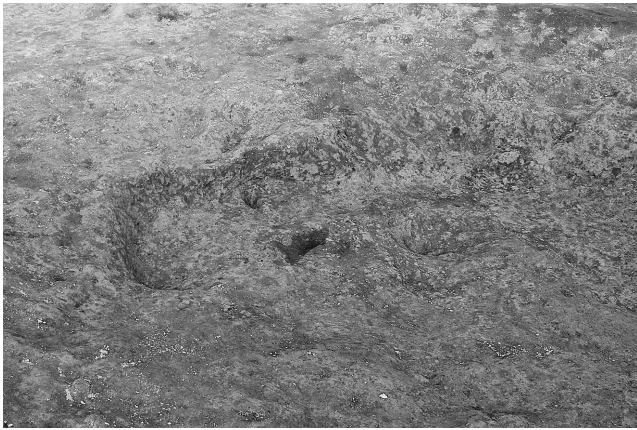




66号墳周溝内土坑



66号墳周溝内土坑土層断面



66号墳周溝内土坑



66号墳周溝内土坑



66号墳周溝土層断面



66号墳周溝内土坑土層断面



66号墳北側石集積個所



66号墳北側石集積個所



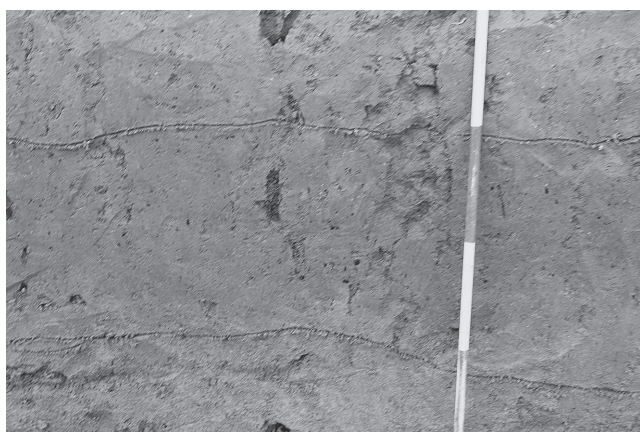
# 図版 6



ローム層標準土層



ローム層中石器出土状況



ローム層中カーボン集中箇所



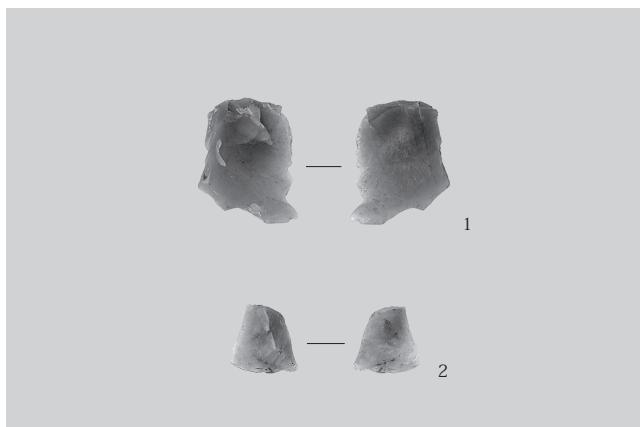
ローム層中石器出土状況



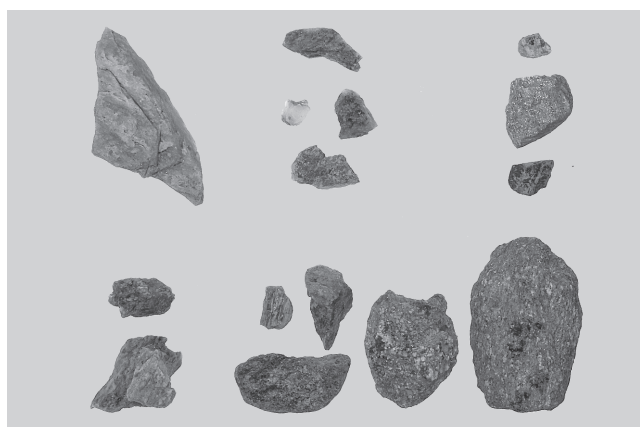
ローム層中発掘調査風景



VII層中の土層断面と平面

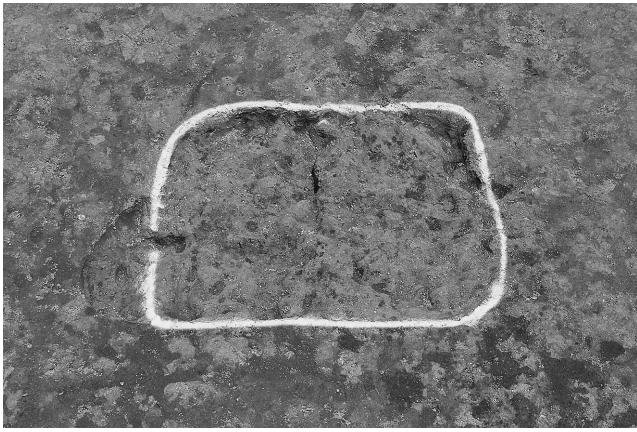


A T層下出土剥片 (1/1)



ローム層中の自然石





A 土坑



B 土坑



C 土坑



柱穴列跡



柱穴列と斜め柱穴



柱穴 4



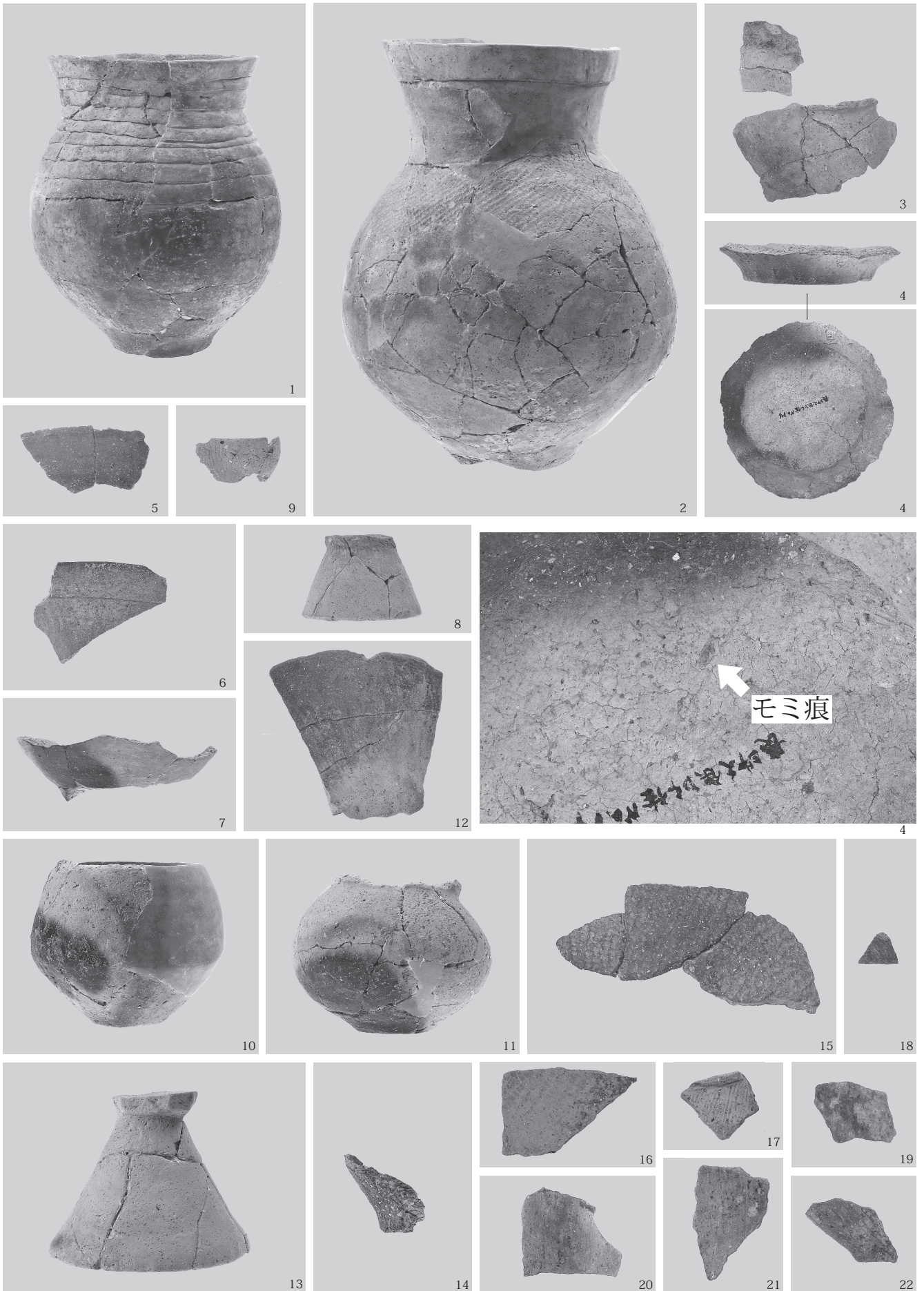
斜め柱穴 5



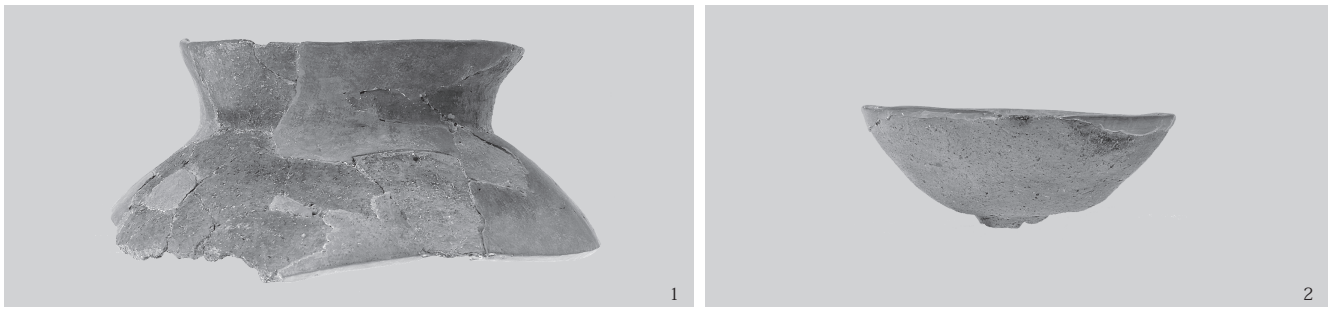
斜め柱穴 6



図版 8



4号住居跡出土土器

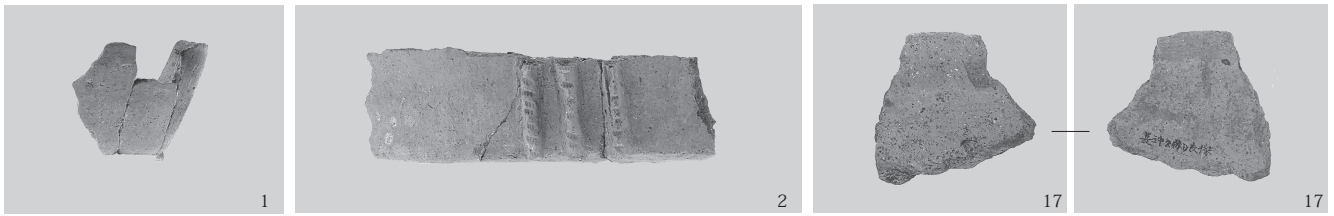


1号住居跡出土土器



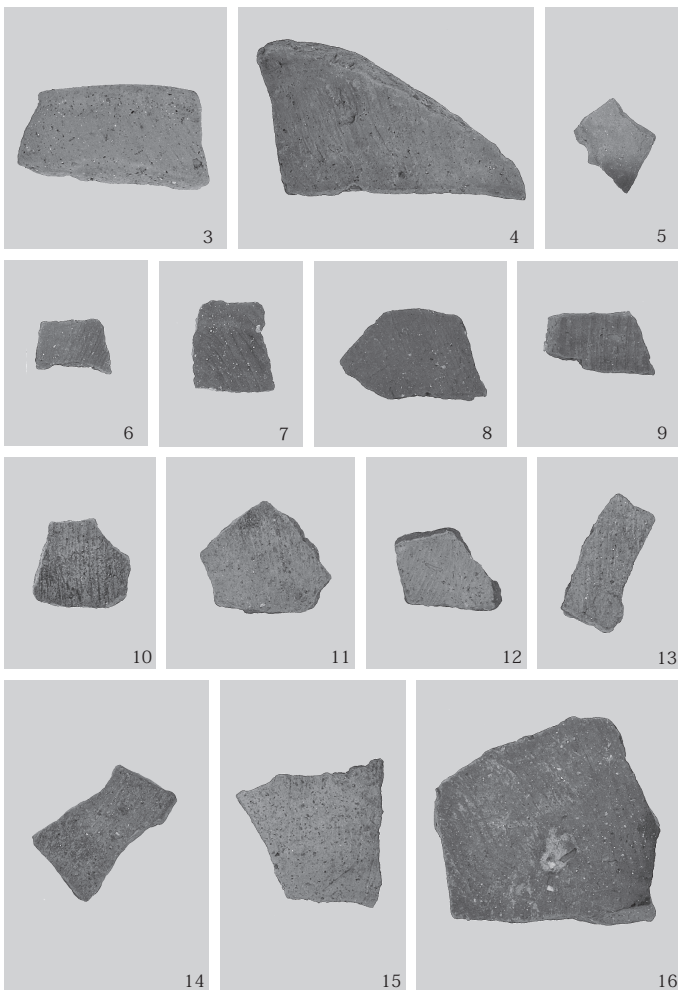
A土坑出土土器

C土坑出土土器



66号墳周溝出土土器

表採埴輪片



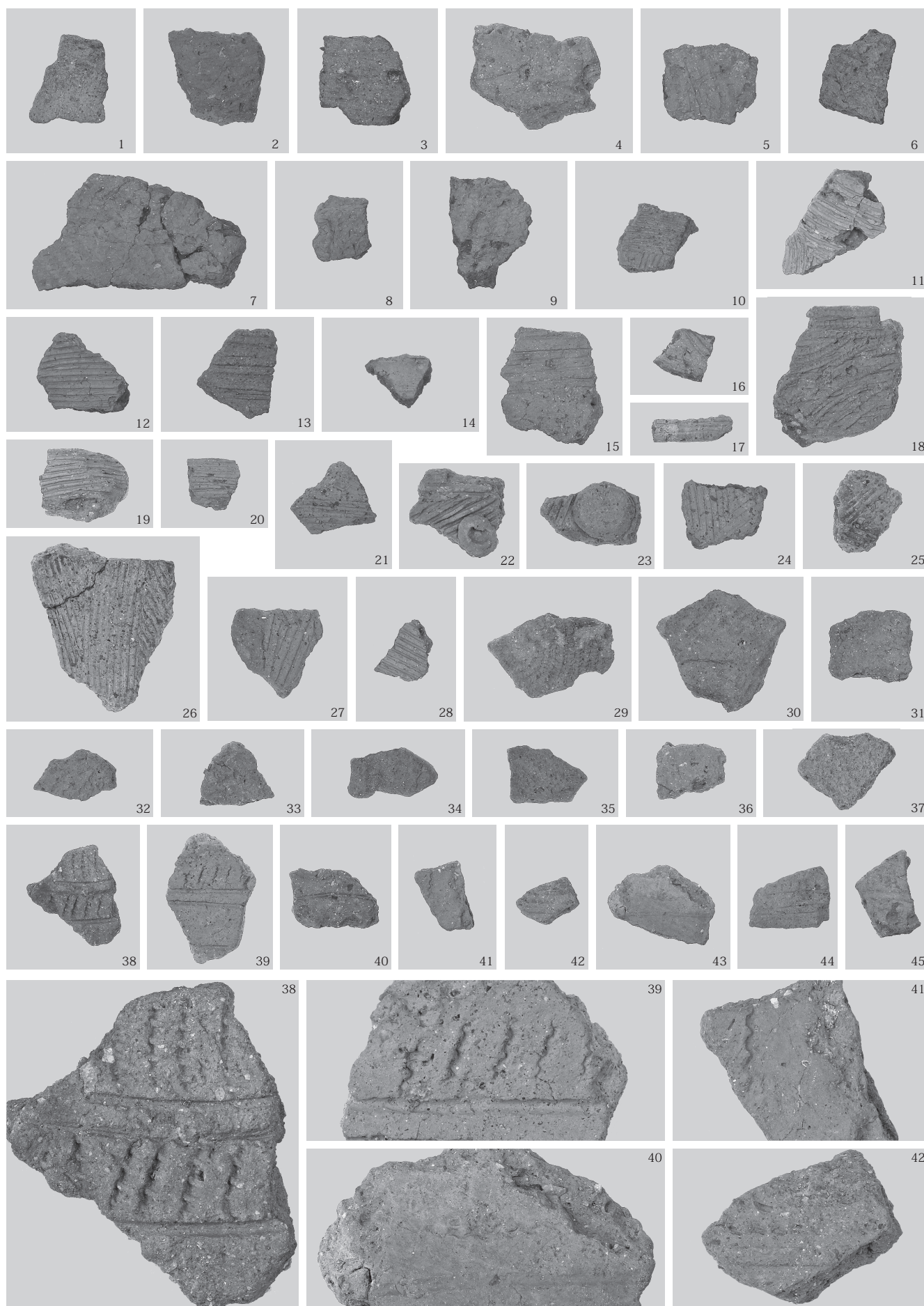
66号墳周溝出土土器



4号住居跡出土礫石材鑑定

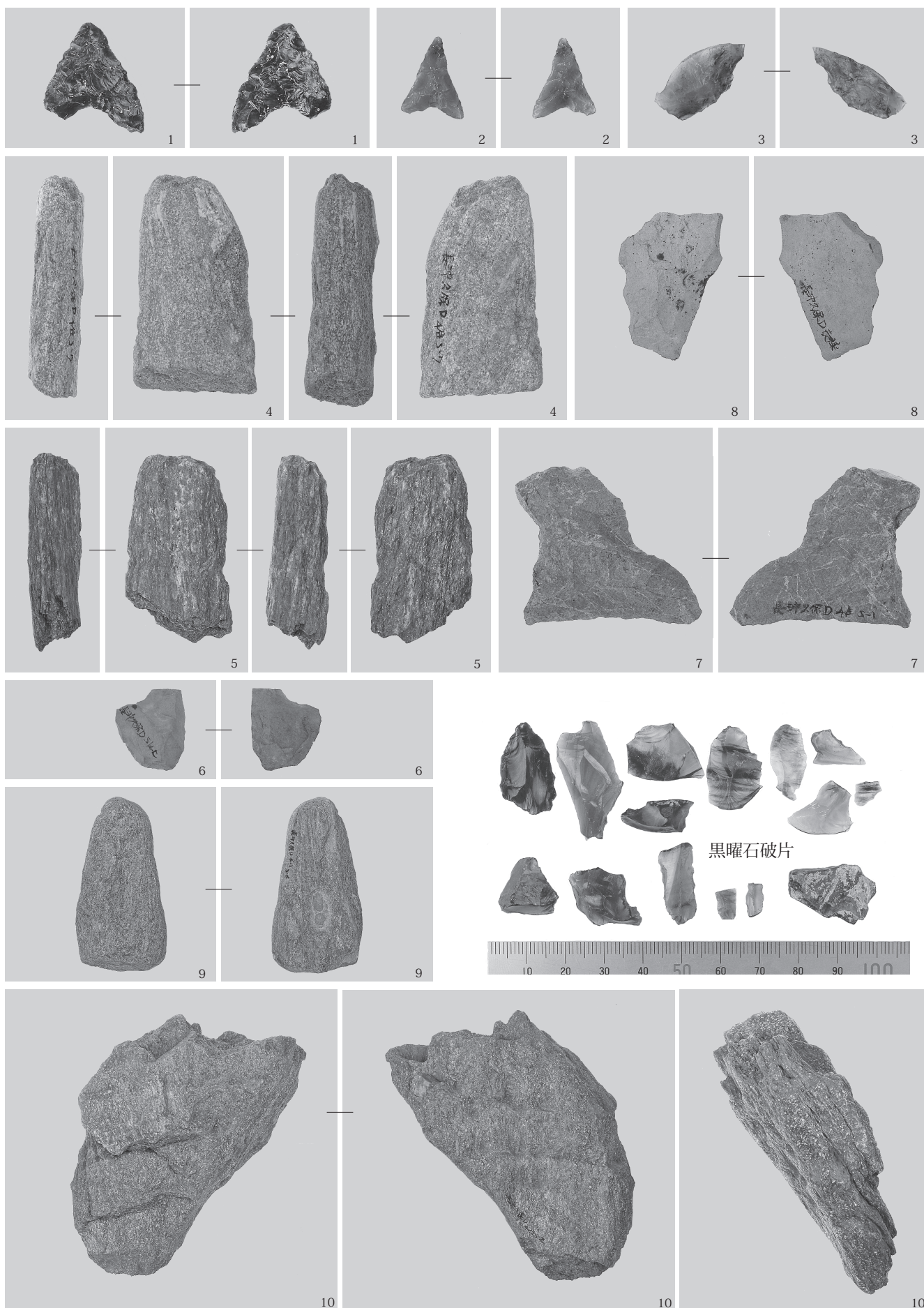


図版 10



縄文時代出土土器（38～42 貝殻復縁文）





縄文時代出土石器

# 報告書抄録

ふりがな	ながおきこふんぐん 14 -くぼちくDちてん・だい66ごうふん-							
書名	長沖古墳群XIV -久保地区D地点・第66号墳-							
副書名								
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	大塚 昌彦 高橋 敦							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番地3号 TEL 0495-25-1185							
発行年月日	2014年(平成26年)12月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ながおきこふんぐん 長沖古墳群 くぼちくD地点 久保地区D地点	さいたまけんほんじょうしこだまちょう 埼玉県本庄市児玉町 ながおきほん 長沖272番1、277 ばん 番1・3	112119	54-300	36° 10' 56.5"	139° 07' 29.9"	2014.5.20 ～ 2014.6.20	324	店舗建設
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
長沖古墳群 久保地区 D地点	集 落	旧石器		A T層下剥片	旧石器時代A T層下石器2点出土。			
		縄 文		縄文時代早期末～ 中期土器 石鏃・打製石斧・ 凹石・多孔石	前期 興津式土器出土。			
		古墳前期	竪穴住居 2軒	吉ヶ谷式系土器 樽式系土器・東海 系土器・前期土器	古墳時代前期の竪穴住居。 炭化材樹種同定でムクロジ・ネ ムノキと県内で類例のない樹種 を特定。大廓式壺口縁破片。			
	古墳群	古墳後期	古墳 1基 周溝内土坑 1基		古墳周溝調査で溝中土坑を確認。			
		その他		土坑 3基 柱穴列 1列		斜め柱穴2箇所。		

---

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第 42 集

## 長 沖 古 墳 群 XIV

—久保地区D地点・第 66 号墳—

---

平成 26 年 12 月 19 日 印刷

平成 26 年 12 月 19 日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒 367-8501 埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号

電話 0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社